

行き先が見えない中での研究活動	1
2020(令和2)年度「特定・指定研究」資料室「研究組織」一覧	2
2020(令和2)年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2020(令和2)年度「一般研究」等研究組織一覧	8
2020(令和2)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	13
海外学会参加・研究調査報告	22
国内学会参加報告	29
獣医抄ワークショップ開催報告	30
国内研究調査報告	32
公開講演会・公開研究会	36
彙報	45

# 研究所報

## 行き先が見えない中での研究活動

大谷大学長・教授 木越 康

この原稿を書いているのは、2020年6月上旬である。2019年12月に中国湖北省武漢市で発生したとされる新型コロナウイルス感染症が数ヶ月の間に世界中に広がり、いまだ終息の糸口さえ見いだせない状況にある。日本では、4月16日に全国に発出された緊急事態宣言が5月25日に解除されたにもかかわらず、地域によっては新たに発症された方の増加傾向も見られる。多くの人が、間髪入れない第二波の訪れかと、戦々恐々としている。これほど先が見えない状況の中で、数週間後に発行される媒体に文章を書くのは思いのほか困難である。読者が手にする時、今ここに書いている重苦しい内容が滑稽に映るほどに平穏な日々が回復しているならいい。さらに大きな苦しみの中に私たちがいないことを強く願いつつ、今日はテレワークでキーボードを叩いている。大谷大学は指導教員のクラスで「登校可能日」を設け、対面での学生指導を少しずつではあるが再開した。あわせて学内施設を利用しての研究活動も、段階的に再開が許されたところである。これらの再始動が順調に進んでいるのか、再び活動自粛を余儀なくされているのか、今はまったく予測できない。

メディアではこの2～3ヶ月、毎日専門家による分析や感染拡大防止策が発信され、さまざまな情報が私たちの元へやってくる。専門家は当初は感染症学や公衆衛生学、免疫学などの医療関係者であったが、世界の主要都市がロックダウンとなり、日本でも自粛要請が長引く中で、必要とされる専門領域は急速に拡散していった。検討すべき深刻な問題が、予想をはるかに超えて細分化されたのである。人間の生命を脅かす存在であったウイルスは、やがて経済活動を停止させて人間生活を脅かし、文化や芸術活動を休止させて生活から豊かさを奪い、人間関係を分断させて心までも蝕みはじめている。そういう状況の中で、経済学者やソーシャルワーカー、政治学者や教育学者、心理学者やカウンセラーなど、新たにさまざまな分野の専門家

の知見が求められる。それぞれが専門の立場から危機感を露わにして対策案を示すが、受けとめる私たちの側は、どの意見にどう従うべきか判然とできないままに、結局はそれぞれの立場でそれぞれに道を選択して進んでいかなければならない。哲学者であり元本学教授であった鷺田清一氏は、新聞のコラムで「それぞれがそれぞれの場所でじぶんの羅針盤をもたねばならないことも思い知った(『京都新聞』2020. 5. 31朝刊)」と書いている。

世界中を震撼させ続けるこの「新型コロナウイルス感染症」の専門家とはいったい誰なのだろうか。大谷大学に所属するさまざまな分野の研究者も、このような「新型コロナウイルス感染症」の脅威に関して専門外なのだと行ってしまっていていいのだろうか。号の「研究所報」には、2020年度の真宗総合研究所のすべての研究内容が紹介される。これらの研究は、一見すると今の社会の深刻な状況とは無縁に思えるかもしれない。しかしおそらく、そうではない。直接医療に関わるわけでも経済活動に関与するわけでもないが、それでもけっして無関係であるとは言えないだろう。加えて、社会が怯え、学生たちが不安を抱くことに対して、「私は専門外だから」と言い放つことはおそらく許されるものではない。「専門」なる諸領域を易々と越え、想像を絶する勢いで拡散し続ける「新型コロナウイルス感染症」の侵略を、私たち人類ははるかに広くて深い人智でもって受け止めなければならない。それぞれがきちんと自分の研究領域を守り、油断なく網を張って待つことも、私たち研究者には大切なことであろう。

先ほどの鷺田氏のコラムのタイトルは「行き先は見えずとも」である。行き先が見えなくても、今、忘れてはならないこと、心に刻むべきことがあると氏は述べる。私たちも「行き先は見えずとも」、自分のなすべき研究を、慎重に、しかし着実に進めていくことが大切なのだという事を、心に刻むべきであろう。

## 2020(令和2)年度「特定・指定研究」資料室研究組織一覧

### 【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開	研究課題	eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入
	研究代表者	木 越 康 (学長・教授・真宗学)
	研究員	酒 井 恵 光 (准教授・計算機科学)
		一 楽 真 (教授・真宗学)
		箕 浦 暁 雄 (教授・仏教学)
	嘱託研究員	戸 次 顕 彰 (講師・仏教学)
		松 下 俊 英 (真宗大谷派教学研究所以助手) 難 波 教 行 (真宗大谷派教学研究所以研究員)

### 【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井 上 尚 実
	研究員	井 上 尚 実 (教授・真宗学)
		Michael J. Conway (講師・真宗学)
		加 来 雄 之 (教授・真宗学)
		新 田 智 通 (准教授・仏教学)
		松 川 節 (教授・東洋史学)
		松 浦 典 弘 (教授・東洋史)
	嘱託研究員	箕 浦 暁 雄 (教授・仏教学)
		James C. Dobbins (オーバーリン大学教授)
		Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授)
		Paul Watt (早稲田大学エクステンションセンター非常勤講師)
		下 田 正 弘 (東京大学教授)
		羽 田 信 生 (毎田周一センター所長)
		Wayne S. Yokoyama (花園大学元講師)
		Robert F. Rhodes (EB誌編集長、本学名誉教授)
		John LoBreglio (EB誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授)
Dash Shobha Rani (准教授・仏教学)		
研究補助員(RA)	三 鬼 丈 知 (本学非常勤講師)	
	井 黒 忍 (准教授・東洋史)	
	Pham Thi Thu Giang (ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授)	
	大 西 和 彦 (ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員)	
	鶴 留 正 智 (博士後期課程第3学年)	
	千 葉 一 生 (博士後期課程第1学年)	
	Yan Ruolin (博士後期課程第2学年) Nguyen Tuong Giang (博士後期課程第3学年)	

<p>西藏文献研究</p>	<p>研究課題 チベット語文献のデータベース化  研究代表者 三宅伸一郎  研究員 三宅伸一郎(教授・チベット学)  上野牧生(講師・仏教学)  松川節(教授・東洋史学)  嘱託研究員 白館戒雲(本学名誉教授)  伴真一郎(2019年度西藏文献研究嘱託研究員)  渡邊温子(特別研究員)(2019年10月～)  Lamao Zhuoma(青海民族大学宗喀巴研究院研究員)</p>
<p>清沢満之研究</p>	<p>研究課題 『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究  研究代表者 西本祐攝  研究員 西本祐攝(准教授・真宗学)  一楽真(教授・真宗学)  加来雄之(教授・真宗学)  藤原正寿(准教授・真宗学)  福島栄寿(教授・近代日本仏教史・近代日本思想史)  西尾浩二(講師・西洋哲学)  大艸啓(講師・日本古代史)  嘱託研究員 藤田正勝(京都大学名誉教授)  名畑直日児(真宗大谷派教学研究員)  浦井聡(任期制助教)  研究補助員(RA) 藤井了興(博士後期課程第3学年)  澤崎瑞央(博士後期課程第3学年)</p>
<p>東京分室指定研究</p>	<p>研究課題 宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的価値観における宗教の役割の解明－  研究代表者 井黒忍  研究員 井黒忍(准教授・東洋史)  青柳英司(PD研究員・真宗学)  大澤絢子(PD研究員・宗教学・近代宗教文学)  鍾宜錚(PD研究員・生命倫理学)</p>

## 【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織
<p>大谷大学史資料室</p>	<p>研究課題 大学史関係資料の収集・整理  室長 Dash Shobha Rani(研究所主事・准教授・仏教学)</p>
<p>デジタル・アーカイブ資料室</p>	<p>研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築  室長 Dash Shobha Rani(研究所主事・准教授・仏教学)  嘱託研究員 川端泰幸(博物館主事・准教授・日本中世史)  清水洋平(本学非常勤講師・特別研究員)  舟橋智哉(2019年度デジタル・アーカイブ資料室嘱託研究員)  Suchada Srisetthaworakul(古典写本研究センター・センター長)  &lt;タイ・アユタヤ&gt;</p>

## 2020（令和2）年度「指定研究」等研究目的紹介

### 特定研究

#### eラーニングなど、 インターネット環境を活用した 新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・教授 木越 康  
(真宗学)

インターネット環境を活用した新しい仏教教育システムの開発・導入を進める。大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと公開することを大きな目的として教育活動を展開してきた。この理念を第三代学長佐々木月樵は「大谷大学樹立の精神」で、仏教について「僧侶の専有物でない已上は、恐らくは仏教学もまたその宗その宗の専有物であってはならぬと思う。即ち仏教が万人の宗教である已上は、その仏教学も、また必ず万人の学たることをそれ自身要求している」と語り、真宗について「学内のみならず、宗教として世間一般の宗教的人格教養の源泉となりうることを深く切望して止まぬ」と述べた。本研究ではこの理念を時代に相応した形でさらに積極的に展開するために、Eラーニングを活用した仏教教育の開発研究を行う。

研究期間は2年とし、その間にEラーニング実施に必要なコンテンツ、システム、運用体制を確立する。コンテンツ面では、「仏教入門」や「真宗入門」、あるいは各経典や思想ごとの講義提供が考えられるが、本研究ではまず「仏教入門」に関するコンテンツ開発から着手する。理由は、Eラーニング実施に向けた課題の一つにテキスト開発があるが、「仏教入門」に関しては2016年に真宗大谷派出版部から発行された『改訂 大乘の仏道－仏教概要－』や2019年発刊の同資料編があり、基礎となる素材が揃っていると考えられるからである。システム面では、まず既存プラットフォームを活用した「仏教入門」配信の実装を進める。実装結果の評価をもとに、プラットフォームの選定・改善を進めることで、実運用への対応を進めたい。運用面は、今後の教育活動を本研究班が継続的に担うものではないが、体制づくりの基礎となる情報を収集し、適当と考えられる制度および形態で継続的に教育活動を展開できる準備を整える。

真宗教育については随時準備を進め、研究期間の2年内を問わず可能となった時点でコンテンツ作成に取

り掛かるが、「仏教入門」に関しては研究最終年の2021年後期にはテスト配信を行い、2022年の実運用開始に向けた態勢を整えたい。

### 国際仏教研究

#### 諸外国における仏教研究の動向の 把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。今年度は欧米班、アジア班の二班の体制で、アジア班の中に中国とベトナムの二地域を含む形で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

#### 〈研究テーマ〉

- ①欧米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。
- ②アジア班 1) 中国：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。2) ベトナム：昨年までの指定研究「ベトナム仏教研究」の成果をまとめる作業を中心とする。特に『日本仏教概説』のベトナム語訳を完成して出版する。

#### 〈活動内容〉

##### 〈欧米班〉

##### ①国際学会への参加

- 1) 第22回国際宗教学宗教史会議 (IAHR) 【開催中止】

国際仏教研究欧米班として応募して発表が認められていた2020年度の国際学会のうち、8月23日から29日までニュージーランドのオタゴ大学を会場にCentres and Peripheries (中心と周縁)をテーマとして開催予定であった国際宗教学宗教史会議世界大会は、コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。5年に1度のIAHR世界大会には、国際仏教研究として2005年の東京大会と2015年ドイツのエアフルト大会においてパネル発表を行っており、今回も以下のようなパネルを準備していた。記録として以下に概要

を報告する。

パネルのテーマは、大会テーマ「中心と周縁」に合わせて“The Significance and Challenges of the Peripheral Nature of Buddhism”（仏教の周縁性：その意義と課題）とした。3名の発表者（井上尚実研究員、ショバ・ラニ・ダシュ嘱託研究員、木越康教授）と1名の応答者（下田正弘嘱託研究員、東京大学）からなる90分のパネル発表が認められていた。各発表題目は以下の通り。

・Inoue Takami, “The Peripheral Origin of Buddhism and its Significance in the Liberation of the Marginalized.”（仏教の起源の周縁性およびそのことが境界に位置づけられた人々の解放のために有する意義）

・Shoba Rani Dash, “The Traditional Buddhists of Eastern India: Efforts to Keep the Buddhist Identity”（東インドの伝統的仏教徒：仏教徒としてのアイデンティティを保持する努力）

・Kigoshi Yasushi, “The Challenges of Buddhist Temples in Contemporary Japan: Focusing on Depopulated Areas”（現代日本の仏教寺院の課題－過疎地域を中心として－）

パネル応答者をお願いしていた下田正弘教授はこのIAHR世界大会の基調講演もされる予定であったが、5年に1回の学会自体がキャンセルされるという残念な結果になってしまった。今回準備した論文については別の機会に発表できればと考えている。

## 2) 第19回国際仏教学会 (IABS) 【開催延期】

本年8月に韓国のソウル大学で開催される予定であった国際仏教学会 (IABS) については、コロナウイルスの影響で1年延期され、2021年の8月16日～20日に同大学で開催されることになった。この学会ではマイケル・コンウェイ研究員が以下のような研究発表を行うことになっている。

・Michael Conway, “The Role of the Two Truths in Daochuo’s Understanding of the Pure Land.”（道禪の浄土理解における二諦の役割）

3) アメリカ宗教学会 (AAR) の年次大会は、11月21日から24日までマサチューセッツ州ボストンで開催される予定であったが、COVID 19のためにオンラインでの開催となり、日程は11月29日から12月10日に変更された。この学会に研究員が参加してアメリカにおける仏教研究の動向を把握し、The Eastern Buddhist 誌の原稿を収集するとともに、2021年にEB誌100周年記念行事をAAR年次大会に合わせて行うための調整を行う。

## ②真宗関係の翻訳研究

### 1) 『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

2017年からカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所、龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが進められてきた。これまで年2回（6月に京都、3月にバークレー）合同ワークショップを開催してきたが、今年度1年間はコロナウイルスの問題で開催を見合わせる事となった。なおアメリカでコロナウイルス感染拡大が深刻になり始めた今年3月上旬にバークレーで開催された第7回ワークショップの状況については、参加したコンウェイ研究員による参加報告が今号に掲載されている。

### 2) 『大乘の仏道』（改訂版）の英訳出版への協力

真宗大谷派の北米開教区アメリカ真宗センターを中心に進められている教師課程教科書『大乘の仏道』（改訂版）英訳事業について、その最終的な英訳校正と訳語の確認作業に国際仏教研究欧米班として協力する。

## ③国際シンポジウムの成果出版

### 1) 真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版

カリフォルニア大学バークレー校のマーク・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から出版予定の論文集 *Adding Flesh to the Bone*（仮題）の編集作業を進める。

### 2) エトヴェシ・ロラード大学 (ELTE) と共催の第2回国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」の成果出版

2016年5月にELTE東アジア研究所と共催した第2回シンポジウムの成果として、ELTEのハマル・イムレ教授と井上尚実研究員の共同編集による英文学術書 *The Buddha’s Words and Their Interpretations* を本年度前期に本研究所から出版する。

## ④The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会 (EBS) の事業

英文学術誌 *The Eastern Buddhist* Vol.49 No.1&2（『菩薩戒』を特集テーマとする合併号）を12月に発行する。1965年から始まったNew Seriesはこの第49巻が最終巻となり、EBS設立百周年を迎える2021年から新たにThird Seriesをスタートさせる。そのために編集体制の更なる充実に取り組み、記念シンポジウム等に向けて準備を進める。

## ⑤公開講演会の開催

コロナウイルス感染拡大の影響で海外の研究者の来

日は難しい状況が続くが、可能な範囲で国際的な仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を開催する。

#### ⑥真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、図書館への移管の可能性について検討する。

## 西藏文献研究

### チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 三宅 伸一郎  
(チベット学)

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

- (1) 専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
- (2) 重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

を目的としている。

また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・經典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。これらの目的を達成するために、今年度は以下の研究を行う。

#### 1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

大谷大学図書館所蔵のチベット語文献のうち、パンチェン・ラマ4世ロサン・チョーキ・ギェルツェン(1570-1662)の『極楽の国土に障害なく行くための迅速な道』を核として、これにいくつかの願文を付随させて一つとした『極楽に生まれるボワ(遷移)と犯戒還浄など』(蔵外13940)は、チベットにおける浄土信仰の実態を知らせる、貴重な資料である。これに対する、関連する文献を博搜した研究成果を公刊する。また、『プトン仏教史』の翻訳研究も行う。併せて、本学所蔵のチベット語文献に存在する稀観文献や、一般に知られているテキストと異なる読みを示す写本などについて、チベット文献学の発展に寄与するため

に、公開を視野に入れ、順次、写真撮影を行う。

#### 2. モンゴル国立大学との共同研究

第2期(2016-18年度)学術交流協定(研究テーマ「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀~17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」)にもとづいて行われた調査研究活動の共同研究成果の刊行を行う。

#### 3. 海外の研究者・研究機関との交流

2018年度に中国蔵学研究中心との間で締結された「学術交流に関する協定書」に基づく共同研究を具体的に進める。また、随時、海外のチベット学研究者らによる公開研究会を随時開催する。

## 清沢満之研究

### 『清沢満之全集』別巻の 編纂と思想研究

研究代表者・准教授 西本 祐攝  
(真宗学)

本研究は、大谷大学編『清沢満之全集』(全9巻、岩波書店、2002-3、以下『全集』)別巻の刊行を主な研究目的としている。

現在、清沢満之の研究において『全集』は清沢満之の著述を踏まえる際のテキストとして必ず用いられており、『全集』刊行はその研究推進に大きく寄与していると言えよう。『全集』編纂の中心的役割を担った真宗総合研究所の本研究は、1981年度の研究所開設から十年を経た、1991年度に発足している。1993年度に当時の研究代表者であった安富信哉教授によって『全集』刊行への本格的な提言がなされて以降、2002年4月の響流館閉館に先んじて、同年2月に響流館内の研究所に実務の場を移すまでの十年間を含め、文献収集と翻刻校正、掲載基準に関する検討が重ねられた。刊行に際しては編集委員11名、編集実務担当教員27名、研究補助員4名という全学的な体制がとられたが、刊行の実現は刊行当時のメンバーのみではなく、研究班発足当時から研究活動に携わってきた研究員、研究補助員と研究補助者(数十名)の尽力によるものであることを、ここに銘記しておきたい。

研究所では、2014年度から本研究を再開し、別巻刊行に向けた活動を展開している。2016年度までは、主に『全集』未収録文献を収集し、翻刻することに努

めた。その結果2017年3月末現在で、新たに清沢満之著述と認めることができる三十数点の文献を収集した。それらについて『全集』掲載基準についての精査を行い、『全集』2巻分に及ぶ基準を満たす文献を確認するに至った。詳細は「大谷大学編『清沢満之全集』未収録の新出清沢満之著述群について」(『研究紀要』第35号所収)を参照されたい。

これらの文献を『全集』別巻として刊行し、清沢満之研究の進展に寄与することが本研究の目的である。昨年度は、出版に向けた編集実務を行い、年度末に別巻Ⅰを刊行した。今年度は別巻Ⅱを刊行する。また、岩波書店からの依頼により、『全集』をオンデマンド版で出版することが決定している。4月から毎月1巻配本予定であり、そのための作業を随時行う。

### デジタル・アーカイブ資料室

## 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

室長・准教授 DASH Shobha Rani  
(仏教学)

本資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資料をデジタル化し、それらを整理、保存すること、そしてそのデータを研究資料として公開、提供することである。2020年度は以下の2つの分野において研究活動を実施する。

1つ目は、大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開に取り組むことである。これまでの公開件数は14,503件で、現時点で1,277件の古典籍の公開準備中であり、今年度も引き続き取り組んでいく(2010年から継続)。

2つ目は、大谷大学所蔵パリー語貝葉写本のデジタル化、整理、保存、公開及び研究である(2017年から継続)。本年度は貝葉写本のデジタル化、貝葉写本付属の包布の調査、稀観文献の整理および大谷大学所蔵貝葉写本のデータベース構築を中心に作業を進める。

### 大学史資料室

## 大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 DASH Shobha Rani  
(仏教学)

大谷大学の歴史に関する様々な資料を収集、整理、管理、保存することが本資料室の主な目的である。それに加えて、資料や情報提供、保存資料の学内展示などを通して資料公開にも努めている。大学史資料の他に、パンフレットやノベルティなど大学発行物を大学史資料として保管していくことも目的としている。

上記の目的を達成するために、2020年度は以下の通り研究活動を推進する。

- ・大学史関係資料の収集、整理、管理、保存作業を実施する。そのなかには、総務課所蔵資料の整理、武田資料の整理と目録の完成作業、他機関からの寄贈図書などの目録・住所録作成などを具体例としてとりあげる。
- ・年2～3回にわたって図書館1階エントランスでのスポット展示を行う。4月に第1回目の展示「大谷大学 in Tokyo」が行われ、現在公開中である。
- ・学内外の方々からの問い合わせに基づき資料収集し、資料提供をする。
- ・全国大学史資料協議会・西日本部会に参加する。得られた情報を本資料室の改善に向けて利用する。

### 東京分室 指定研究

## 宗教と社会の関係をめぐる

### 総合的研究

## —社会的価値観における宗教の役割の解明—

研究代表者・准教授 井黒 忍  
(東洋史)

多様な価値観を内包する現代社会において、宗教のあり方が問われつつある。そうした中、社会において宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も多い。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。人

類にとって根本的な問いであり続ける「どう生きるのか?」、「どう死ぬのか?」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。あわせて、新型コロナウイルス感染症の流行による日常生活や思考の変化に伴い、新たな価値観の出現や既存の価値観の変容が想定されるが、こうした事態に対して、宗教が果たしうる役割やその意義についても考察を行う予定である。各研究員の研究目的は以下の通りである。

青柳研究員は、親鸞の主著とされる『教行信証』の訓点に着目して、親鸞の言語表現の特徴と独自性を明らかにする。これによって親鸞が当時の社会、特に仏教界に対して、自身の思想をどのような仕方で表明しようとしていたのかを探る。

大澤研究員は、近代日本(1868-1945)の枠組みで、

文学・雑誌・映画も含む大衆文化のメディアにおける仏教の展開を考察する。これによって寺院や宗門外の一般社会における仏教受容の実態を解明し、近代日本文化史としての仏教のあり方を考察する。これと並行して、近代日本における女性と仏教に関する諸問題に着目し、社会における仏教の役割を教義と実践の両面から考察する。

鍾研究員は、「どう死ぬのか」という問題について、日本と台湾を中心に、それぞれの終末期医療の法制化の動きを調査し、終末期の意思決定に関する宗教者の取り組みを考察することで、人生の最終段階における宗教の役割を解明する。

井黒研究員は、研究全体のとりまとめを行うとともに、前近代中国における仏教と社会との関係性を考察する。

## 2020（令和2）年度「一般研究」等研究組織一覧

<p>【2017~2020年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）</p>	<p>研究課題 変動帯の文化地質学 研究代表者 鈴木寿志 研究員 鈴木寿志（教授・文化環境学） 廣川智貴（准教授・ドイツ文学） 協同研究員 清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員） 大井修吾（滋賀大学共同研究員） 梅田真樹（京都西山短期大学非常勤講師） 研究協力員(支援)石橋弘明（2019年度一般研究鈴木班研究協力員（支援））</p>
<p>【2017~2020年度「科研費」採択】 一般研究（西村班①）</p>	<p>研究課題 地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開 研究代表者 西村雄郎 研究員 西村雄郎（教授・地域社会学・コミュニティ論） 協同研究員 岩崎信彦（神戸大学名誉教授） 鱒坂学（同志社大学名誉教授） 杉本久未子（元大阪人間科学大学教授） 堤圭史郎（福岡県立大学人間社会学部准教授） 寄藤晶子（福岡女学院大学准教授） 加藤泰子（同志社大学嘱託講師） 高野和良（九州大学大学院人間環境学研究院教授） 松宮朝（愛知県立大学教育福祉学部准教授） 相川陽一（長野大学環境ツーリズム学部准教授） 小内純子（札幌学院大学法学部教授） 河野健男（同志社女子大学特任教授） 藤井和佐（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）</p>
<p>【2017~2021年度「科研費」採択】 一般研究（上野班）</p>	<p>研究課題 世親作『釈軌論』の総合的研究 研究代表者 上野牧生 研究員 上野牧生（講師・仏教学） 協同研究員 堀内俊郎（浙江大学ポストドクトラルフェロー）</p>



【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究 (武田班①)	<p>研究課題 5～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較的研究と3Dアーカイブ作成</p> <p>研究代表者 武田 和 哉</p> <p>研究員 武田 和 哉 (教授・歴史学・考古学・人文情報学) 川 端 泰 幸 (准教授・日本中世史)</p> <p>協同研究員 吉川 真 司 (京都大学大学院文学研究科教授) 横 内 裕 人 (京都府立大学文学部教授) 藤 原 崇 人 (龍谷大学文学部准教授) 正 司 哲 朗 (奈良大学社会学部准教授) 古 松 崇 志 (本学非常勤講師・京都大学人文科学研究所准教授) 高 橋 学 而 (藤川学園公務員ビジネス専門学校教員)</p>
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究 (武田班②)	<p>研究課題 歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究</p> <p>研究代表者 武田 和 哉</p> <p>研究員 武田 和 哉 (教授・歴史学・考古学・人文情報学) 三 宅 伸一郎 (教授・チベット学)</p> <p>協同研究員 吉川 真 司 (京都大学大学院文学研究科教授) 渡 辺 正 夫 (東北大学大学院生命科学研究科教授) 矢 野 健太郎 (明治大農学部教授) 江 川 式 部 (國學院大学文学部准教授) 横 内 裕 人 (京都府立大文学部教授) 鳥 山 欽 哉 (東北大学大学院農学研究科教授) 等々力 政 彦 (横須賀市自然人文博物館学芸員) 佐 藤 雅 志 (東北大学農学部准教授) 清 水 洋 平 (本学非常勤講師・特別研究員) 水 谷 友 紀 (京都府立大学学術研究員)</p>
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究 (福島班)	<p>研究課題 新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究</p> <p>研究代表者 福 島 栄 寿</p> <p>研究員 福 島 栄 寿 (教授・近代日本仏教史・近代日本思想史)</p> <p>協同研究員 知 名 定 寛 (神戸女子大学文学部教授) 長 谷 暢 (法政大学沖縄文化研究所国内研究員) 川 邊 雄 大 (日本文化大学専任講師)</p>
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究 (村山班)	<p>研究課題 西洋哲学の初期受容とその展開－井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開－</p> <p>研究代表者 村 山 保 史</p> <p>研究員 村 山 保 史 (教授・西洋哲学) Michael J. Conway (講師・真宗学)</p> <p>協同研究員 西 尾 浩 二 (講師・西洋哲学) 味 村 考 祐 (任期制助教・西洋哲学) 狭 間 芳 樹 (本学非常勤講師・特別研究員) 三 浦 節 夫 (東洋大学ライフデザイン学部教授) ライナ・シュルツァ (東洋大学情報連携学部准教授) 長谷川 琢 哉 (東洋大学井上円了研究センター研究助手) 東 真 行 (親鸞仏教センター研究員)</p>

<p>【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（松川班）</p>	<p>研究課題 モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究</p> <p>研究代表者 松川 節</p> <p>研究員 松川 節 (教授・人文情報学・東洋史学) 三宅 伸一郎 (教授・チベット学)</p> <p>協同研究員 小野 浩 (京都橋大学文学部教授) 白石 典之 (新潟大学人文社会科学系教授) 二神 葉子 (独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化財情報資料部長) 山口 欧志 (独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター研究員) 松田 孝一 (大阪国際大学名誉教授) 本中 眞 (元・内閣参事官) 伊藤 崇展 (大阪大学大学院文学研究科博士課程第3学年)</p> <p>B. ツォクトバートル (Tsogtbaatar, モンゴル科学アカデミー考古研究所収蔵実験室部門主任・研究員)</p> <p>B. ハシマルガド (Khashimargad, モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局長)</p> <p>J. サロールボヤン (Saruulbuyan, 元・モンゴル国立博物館館長)</p> <p>N. アムガラシ (Amgalan, モンゴル国ガンダンテクチェニン寺院学術文化研究所事務局長・研究員)</p> <p>研究協力員(RA) ARILDII BURMAA (博士後期課程第3学年)</p>
<p>【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（コンウェイ班）</p>	<p>研究課題 中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究</p> <p>研究代表者 Michael J. Conway</p> <p>研究員 Michael J. Conway (講師・真宗学)</p> <p>協同研究員 齊藤 隆信 (佛教大学教授) 宮井 里佳 (埼玉工業大学教授) 大西 磨希子 (佛教大学教授)</p> <p>研究協力員(RA) 三池 大地 (博士後期課程第3学年)</p>
<p>【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（西村班②）</p>	<p>研究課題 地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題</p> <p>研究代表者 西村 雄郎</p> <p>研究員 西村 雄郎 (教授・地域社会学・コミュニティ論)</p> <p>協同研究員 岩崎 信彦 (神戸大学名誉教授) 鱒坂 学 (同志社大学名誉教授) 杉本 久未子 (元大阪人間科学大学教授) 堤 圭史郎 (福岡県立大学人間社会学部准教授) 寄藤 晶子 (福岡女学院大学准教授) 加藤 泰子 (同志社大学非常勤講師) 高野 和良 (九州大学大学院人間環境学研究所教授) 松宮 朝 (愛知県立大学教育福祉学部准教授) 相川 陽一 (長野大学環境ツーリズム学部准教授) 小内 純子 (札幌学院大学法学部教授) 河野 健男 (同志社女子大学特任教授) 藤井 和佐 (岡山大学大学院社会文化科学研究科教授)</p>
<p>【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（井上班）</p>	<p>研究課題 支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発</p> <p>研究代表者 井上 和久</p> <p>研究員 井上 和久 (准教授・特別支援教育)</p> <p>協同研究員 大久保 圭子 (平安女学院大学准教授) 高橋 真琴 (鳴門教育大学教授) 姉崎 弘 (常葉大学教授)</p>

【予備研究】 一般研究（加来班）	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係の解明と国際的連携体制の構築 加来雄之（教授・真宗学） 加来雄之（教授・真宗学） 福島栄寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史） 浦井聡（任期制助教・宗教哲学） 織田顕祐（本学名誉教授） 川邊雄大（日本文化大学専任講師）
【予備研究】 一般研究（木越班）	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	人口減少地域の持続可能性と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究 木越康（教授・真宗学） 木越康（教授・真宗学） 東舘紹見（教授・日本仏教史） 徳田剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学） 藤枝真（准教授・真宗学・哲学） 藤元雅文（准教授・真宗学） 野村実（任期制助教・社会学・地域交通論・地域社会学） 阿部友香（任期制助教・農村社会学・家族社会学） 本林靖久（本学非常勤講師・特別研究員）

## 【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（原田班）	研究課題 研究代表者	ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから 原田奈名子（教授・体育科教育・舞踊学および舞踊教育学・Somatics）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（池永班）	研究課題 研究代表者	嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究 池永真義（准教授・美術教育学）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研究課題 研究代表者	東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明 清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（渡邊班）	研究課題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 渡邊温子（元本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（翁班）	研究課題 研究代表者	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開－「主体」論を超えて 翁和美（特別研究員）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（西川班）	研究課題 研究代表者	タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響 西川幸余（准教授・英語教育／英米文化）
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（岡部班）	研究課題 研究代表者	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討 岡部茜（講師・社会学・社会福祉学）
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（鍾班）	研究課題 研究代表者	儒教文化で捉える「孝」の表現と終末期医療倫理の再構築－日本と台湾の比較を中心に－ 鍾宜錚（PD研究員・生命倫理学）
【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（スミザーズ班）	研究課題 研究代表者	Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English Ryan W. Smithers（准教授・外国語教育・言語学・英米文化）

【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（徳田班）	研究課題 研究代表者 研究員	日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究 徳田 剛 徳田 剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学）
【2019～2023年度「科研費」採択】 一般研究（高橋班）	研究課題 研究代表者	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤 高橋 真（准教授・比較認知科学）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（田中班）	研究課題 研究代表者	民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望 田中正隆（准教授・社会学）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（中野班）	研究課題 研究代表者	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究 中野 加奈子（准教授・社会福祉学）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（上原班）	研究課題 研究代表者	『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐる－ 上原 尉 暢（元本学非常勤講師・特別研究員）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（麻生班）	研究課題 研究代表者	19世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較 麻生 陽子（講師・ドイツ文学・文化）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（浦井班）	研究課題 研究代表者	田辺哲学の中期から後期への発展の解明－武内義範との交流を踏まえて 浦井 聡（任期制助教・宗教哲学）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（鎌田班）	研究課題 研究代表者	中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究 鎌田 智恵（任期制助教・歌学・日本書紀受容史）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（高井班）	研究課題 研究代表者	仏教講釈文献の利用と説話の発展に関する写本学的研究－敦煌文献を中心に－ 高井 龍（任期制助教・中国文学・敦煌文学）
【2016～2020年度「科研費」採択】 一般研究（佐藤班）	研究課題 研究代表者	説話の生成に関する研究－貴族・寺院社会における記録の作成・管理との関連を中心に－ 佐藤 愛弓（准教授・国文学）
【2020～2024年度「科研費」採択】 一般研究（井黒班）	研究課題 研究代表者	アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究 井黒 忍（准教授・東洋史）
【2020～2024年度「科研費」採択】 一般研究（江森班）	研究課題 研究代表者	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知－非認知能力の測定 江森 英世（教授・数学教育学）
【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（狭間班）	研究課題 研究代表者	維新期における東本願寺の破邪論とキリシタン－樋口龍温の未公開史料の分析と公開－ 狭間 芳樹（本学非常勤講師・特別研究員）
【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（山本班）	研究課題 研究代表者	戦国期の誓約をめぐる社会史的思想史的研究 山本 春奈（任期制助教・日本中世史・特別研究員）
【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（野村班）	研究課題 研究代表者	中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究 野村 実（任期制助教・社会学・地域交通論・地域社会学・特別研究員）
【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（大原班）	研究課題 研究代表者	新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究 大原 ゆい（講師・社会学）

【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（本林班）	研究課題 研究代表者	真宗地域における葬墓制と世界観に関する民俗学的研究 本林 靖久（本学非常勤講師・特別研究員）
【2020～2023年度「科研費」採択】 一般研究（青柳班）	研究課題 研究代表者	近世における『教行信証』の創造的解釈－智暹『樹心録』の研究－ 青柳 英司（PD 研究員・真宗学）
【2020～2022年度「科研費」採択】 一般研究（大澤班）	研究課題 研究代表者	近代日本における教祖像形成に関する総合的研究－最澄・空海・ 親鸞・日蓮－ 大澤 絢子（PD 研究員・宗教学・近代宗教文学）
【予備研究】 一般研究（阿部班）	研究課題 研究代表者	ASEAN サッカーのグローバル化に関する社会学的分析 阿部 利洋（教授・社会学）
【予備研究】 一般研究（川端班）	研究課題 研究代表者	浄土真宗寺院における布教テキストとしての由緒書の基礎的研究 川端 泰幸（准教授・日本中世史）
【予備研究】 一般研究（喜多班）	研究課題 研究代表者	在朝鮮日本人画家加藤松林人の阿南市所蔵作品と遺稿に関する研究 喜多 恵美子（教授・韓国朝鮮美術）
【予備研究】 一般研究（谷班）	研究課題 研究代表者	自ら学び続ける教員養成プログラムの構築－コーチングとリフレク ションの導入研究－ 谷 哲弥（講師・理科教育）

## 2020(令和2)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

### 共同研究

#### 地方社会の解体的危機に抗する 〈地域生活文化圏〉の展開と課題

研究代表者・教授 西村 雄郎  
(地域社会学・コミュニティ論)

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、政府が「選択と集中」をキーワードとして地方再編を推進していることに対抗し、各地域がもつ自然・歴史・文化の中で育まれた地域固有の生活原理である〈地域イデア〉を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成しているサステナブルな〈地域生活文化圏〉の特質を解明し、これを通して「日本社会の新たなあり方」を構想することにある。

この課題を達成するため、本研究チームは2014-2016年度（「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉形成の可能性」と2017-2019年度（「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開」）に科学研究費基盤研究（B）をうけ、研究対象として設定した北海道十勝地域、宮城県大崎地域、京都府綾部地域、大分県日田地域の4圏域の調査研究を行い、その成果を研究報告書にまとめた。第1期では各圏域の地域活動の事例的分析を行い、第

2期では事例研究を深めるとともに、それらの活動の〈地域生活文化圏〉における意味づけに分析を加え、研究対象地域の特質を明らかにしてきた。

本研究では、これまでの研究を補う調査研究を行いながら、一方でその地域的特質がいかに歴史的かつ構造的に形成されてきたかを深く問い、他方で生活者によって生きられてきた〈地域イデア〉の変化をとらえ、この成果に比較社会学的考察を加えることによって「危機に抗する〈地域生活文化圏〉展開」の可能性と課題を明らかにし、それによって「日本社会の新たなあり方」を構想していきたいと考えている。

### 共同研究

#### 支援が必要な子どもと親のための 光・音・匂い環境を用いた 『親子の遊び空間』の開発

研究代表者・准教授 井上 和久  
(特別支援教育)

1974年にオランダの知的障害者の施設で始まったスヌーズレンは、意図的に設定された部屋や空間の中で、光、音、香りなどの感覚的刺激により、人へのリラックス効果と活性的な効果を導く。我々はこれま

で、障害のある子どもへスヌーズレン環境を活用した教育やセラピーの実践を行い、子どもの発達や心理面での改善に効果があることを検証してきた。しかし、これまでのスヌーズレンの実践の主な場は施設や学校であったため、使用する器材も高価であり、家庭で実施することができない現状であった。そのため我々は、家庭に導入しやすいモデルとして、光、音、香り、触感覚などを取り入れた「親子の遊び空間」を開発することとした。

本研究の大きな特色である「親子の遊び空間」は、スヌーズレンの理論に基づき研究開発を行う、家庭で実施できる初めての物理的空間である。光や音を発する器材、心地よい触感覚のおもちゃなどにより、自宅の部屋の中でスヌーズレンルームと同じような空間を作り出す。優しい光・ヒーリング音楽や自然の音、爽やかな香りなどのある空間で親子が遊びを通して、相互に刺激し合い共感し合う時間を体験する。空間が生み出す親子が感覚を共有して感情を交換しあう三項関係の強化やリラクセス効果から、親自身が心理的に安定し子どもに関わろうとする意欲が高まる。そして、親の安定的な関わりが促進されることにより子どもの愛着形成がなされ、心身の発達や情緒面の安定が培われる。このように「親子の遊び空間」は、子育ての悩みを抱える親の心理的回復と子どもの発達支援の双方に効果があると期待でき、マルチリトメントの予防にも有効であると考えている。

本研究は、①発達障害の子どもの親への調査、②遊び空間で使用する光等の機器の開発、③「親子の遊び空間」の構成、④「親子の遊び空間」の体験の効果検証、⑤「親子の遊び空間」の実用と普及のための展開の流れで進める。

### 共同研究（予備研究）

## 東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係の解明と国際的連携体制の構築

研究代表者・教授 加来 雄之  
(真宗学)

本研究は、東アジア諸国（中国、台湾、韓国）の近代化における思想形成において日本の仏教と哲学がもった影響、特に各国の近代化に共通する仏教と西洋哲学の相互影響を取り上げ、東アジア諸国の仏教に与えた影響を解明し、あわせて各国の仏教学・哲学・歴史学研究者との国際的連携の下で研究を進めることで、

近代仏教における哲学の役割、東アジアの哲学における仏教の役割、そして両者にとっての〈近代〉とは何かを問い直すための学際的国際的な視座とサークルを創出することである。

予備研究として「東アジア各地域の近代化において仏教と西洋哲学は、どのような影響を持ち、またどのような役割を果たしたか」について、各地域の共通性と差異を明らかにすることに特化して行う。

下記の①～⑤の研究部門を設定し、各部門の研究を各地域の研究者と協力してすすめるが、まずシンポジウム形式の公開研究会で研究課題などを共有し、東アジア各地域の仏教の近代化における共通性と差異を明らかにする。また専門的知見を得ることを目的として3回程度の公開講演会を開催する予定である。

①日本については、日本思想が近代化する際に仏教と哲学とが相互に影響していたことを明らかにする。

②中国については、中国仏教における宗教哲学の受容、とくに中国仏教における日本仏教からの経典理解の影響を探る。

③台湾については、日本植民地時代、および戦後における日本仏教の影響を明らかにする。

④韓国については、日本植民地時代に日本に留学した僧侶（韓龍云など）の著作を通して、韓国仏教における日本仏教からの影響を明らかにする。

⑤東アジアの仏教と哲学の影響関係について、①～④までの影響関係を各地域の人間関係や、思想表現に使用される概念に注目して、包括的に明らかにする。

### 共同研究（予備研究）

## 人口減少地域の持続可能性と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究

研究代表者・教授 木越 康  
(真宗学)

本研究の目的は、人口減少のさらなる進行とともに様々な問題が深刻化する地域にあって、真宗学・宗教学・社会学・歴史学・民俗学などの複数の学問分野の知見や分析方法を用いながら、地域社会と仏教寺院の現状と課題を把握し、今後の地域社会における仏教寺院の社会的役割を明らかにするところにある。

今年度の研究内容は、上記の研究目的のもと従来取り組んできた「新しい時代における寺院のあり方研究」の成果に基づき、これまでの調査研究対象地域の周辺にその対象を広げ、地域の人口動態や生活インフ

ラ、住民自治の実態等の調査（地域研究）をすすめることと、そこに立地する寺院の基本情報の収集と分析や関係者ヒアリング（寺院研究）を行うことである。また、これまでの調査研究の成果を、より広い視野に立って検証し、その意義と方向性を更に明らかにするため、同課題に取り組む諸研究機関との交流をより積極的に行っていく。

具体的な研究計画は、下記の通りである。

### 1【地域研究】

- ①国勢調査、各自治体による統計データの分析による人口動態の把握
- ②各自治体による地域総合研究計画等の資料の分析による地域課題の析出など

各自治体が公表している統計データおよび必要であれば自治体の役所や当該地域の社協への聞き取り調査などによって、情報を収集し人口動態および地域の課題の把握を行う。

### 2【寺院研究】

- ①対象地域における仏教寺院の分布と寺院の特徴（宗派・沿革・立地条件等）
- ②各寺院の運営状況（人員構成、運営体制、葬儀・法事や仏事の実施状況等）など

対象地域に立地する仏教関係者への聞き取り調査を中心に必要な情報を収集し、対象地域における寺院の特徴や寺院の運営状況および課題の把握を行う。新型コロナウイルス感染症の拡大への配慮をしつつ、可能な限り、調査を遂行していく。

また、上記の1、2に関して書籍および研究論文、および専門家や研究者による研究会の開催、参加を通して、人口減少、過疎問題に関する最新の研究調査動向を把握する。

## 個人研究

### アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究

研究代表者・准教授 井黒 忍  
(東洋史)

グローバル化や環境問題が人々の生活や文化を大きく変容させつつある現在、資源をめぐる問題は、地域間・国家間において紛争を引き起こす主たる要因の一つとなっている。中でも、水資源をめぐる問題は、気候変動や人口増加に由来する利用可能量の減少とその地域的・時間的な偏在が問題視されてきた。それでもなお増大し続ける水需要に対して、現代社会は

テクノロジー開発などを通じた供給量の増加という方法によって対応を図ってきた。ただし、これは同時に地域間・国家間における経済的格差を人類の生存に不可欠な水資源へのアクセスというレベルにまで押し広げ、摩擦や衝突をより激化させるという結果を生み出すこととなった。特にその衝突は、水資源の枯渇や減少、不公平な分配が直接的に深刻な問題を引き起こす乾燥地域および半乾燥地域において顕著である。

そこで、本研究の目的は、現代社会における資源問題の重要性に鑑み、歴史的事例および地域的事例の中に問題解決への糸口を探ることにある。そのために、多様な水源を利用した灌漑農業が行われる一方で、水資源の変動が顕著な影響を及ぼすアフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域において、歴史的に水資源の利用と管理に関する権利はいかに認識され、取り扱われてきたのかという問いを設定する。研究方法として、中国西北部、ウズベキスタン、インド、エジプトを対象地域に設定した上で、文字資料の読解を通して各地域の水利権の内容を明らかにし、フィールド調査の成果との融合を行う。さらに、共通項を設定して各地域の水利権に関する情報を類型化し、比較を通して地域間における異同を明らかにする。研究の成果として、各地域の水利権のあり方を形成と変容のプロセスを踏まえて叙述するとともに、これをモデル化し、他の研究分野との対話のためのプラットフォームの構築を目指す。

## 個人研究

### 健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知 —非認知能力の測定

研究代表者・教授 江森 英世  
(数学教育学)

平成27年度から令和元年度に行ってきた研究（基盤研究B）では、経験的直観に基づく「聞こえないものを聞く能力」という聴覚障害児のコミュニケーション能力の発見がもたらされた。この発見は、健聴児が聴覚障害児から学ぶべきものがあるという教育思想の転換を孕んでいる。それぞれの持つ能力を認め合い、互いの優れた能力を学び合おうとすることは、真の意味で両者の共生をもたらすことになる。そして、この聞こえないものを聞く能力には、認知的な能力を超えた非認知的な能力が関わっていることも分かってきた。

本研究では、数学的コミュニケーションにおける認

知-非認知能力の相補的な関係をさらに解明し、健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーション能力の実相を捉えることを目的とする。ここで「非認知的」という鍵概念は、新しいアイデアを生み出すコミュニケーションの創発性に関する研究成果として得られた認知的理解を超える何かが創発には必要であるという考え方を基に、本研究の課題として新たに定義するものである。非認知的能力の一部としての「聞こえないものを聞く能力」の究明は、平成15・16年度の研究成果として得られてきた「創発には超越という自分と他者を乗り越える契機を得ることが大切である」という研究をさらに進め、代表者に取り組んできたコミュニケーションの創発性のメカニズムを究明するために必要な手がかりを与える研究となると考えている。

本研究で作成される測定ユニットを用いた具体的な診断は、数学の授業を理解することが困難であるという問題は個別の学習者の数学的な能力の欠如を意味するのではなく、数学を理解する過程におけるコミュニケーションの問題として取り組まれる必要があるという結論をもたらすと考えている。本研究の学術的な意義は、学習者の数学的コミュニケーション能力の未成熟がもたらす学習上の障害を究明する方法論を構築することにある。

## 個人研究

### 維新时期における東本願寺の破邪論とキリシタン —樋口龍温の未公開史料の分析と公開—

研究代表者・特別研究員 狭間 芳樹  
(比較宗教学)

17世紀以来、長く禁じられてきたキリスト教が再び広まりつつあった維新时期において、それを危惧する国学・儒学者、仏教者たちは「破邪」、すなわち反キリスト教を説き、数多の破邪書を書き上げた。もっともそのほとんどは旧来の通俗的破邪論を踏襲し、単に邪宗門観を煽るに過ぎないものであったが、そうしたなか東本願寺の那蘇防禦掛として独自のキリスト教研究を進めたのが樋口龍温(1800~1885)である。樋口は江戸に出向き、当時はまだ禁書であった聖書をはじめ、西洋の自然科学や芸術にいたるまで多岐にわたる領域の書物を買いとめ、それらの理解を通して、キリスト教を論駁しうる新たな破邪論の構築に努め

た。

幕末の1867年、長崎の浦上でおこったキリシタンの露見(浦上四番崩れ)では、捕縛された信徒たち3000余名が北陸・中部以西の諸藩(諸県)への流配に処された。このとき流配先で改宗の説諭を受けるも拒んだキリシタン民衆は苛酷な迫害を受け、多くが殉教へと至っている。民衆史研究につきまとう史料的制約も相俟って、殉教についての考察は、これまでのキリシタン研究で先送りにされてきた。そこで本研究においては、樋口のもとで学び、浦上の信徒たちに棄教を迫った松本白華や安藤劉太郎(＝関信三)といった破邪僧に注目し、彼らが如何なる説諭をおこなったのかを検証することにより民衆のキリスト教理解、ひいては殉教の動機を探る糸口を見いだしたい。

近年、かつて樋口が住職をつとめた京都市の圓光寺で世界的に貴重な漢訳聖書が発見されたことは記憶に新しいが、それらの未公開史料とあわせて『關邪護法策』『急策文』(いずれも1863年刊)といった樋口の破邪書を分析し、その思想を読み解くことで、維新时期における東本願寺の破邪論、そして近世から近代への移行期における世俗秩序と宗教との関係をキリシタン研究の視座からあきらかにしていく。

## 個人研究

### 戦国期の誓約をめぐる 社会史的思想史的研究

研究代表者・任期制助教 山本 春奈  
(日本中世史)

日本の中世社会において、何らかの約束を交わす際には神仏の介在を必要とした。その文書形式として平安末期に現れたのが起請文であり、これは誓約事項およびその違反時に神仏罰を受ける旨を、複数の神仏名(勸請神)を伴って記載した点に特徴がある。一般的に起請文は戦国期以降、神仏への畏敬の念の希薄化という時代思潮に伴い形骸化していくとされてきた。近年、起請文の契約書としての機能性や、決まった形式で提出するという儀礼性への注目から形骸化論が見直されつつあるものの、勸請神についてはほぼ触れられていない。しかし勸請神が起請文ごとに細かく選択されていた状況から、当時の誓約に神仏が何らかの機能を有していたことが読み取れる。

一方で勸請神に注目した研究では、そこから中世人の持つ神仏世界観や、大名権力・地域秩序形成における地域鎮守の機能などが明らかにされている。ただし



これらの研究は、他の目的から勧請神をひとつの素材として扱っているため、誓約と勧請神とがどのように関連していたのかが不明であり、そもそも挙げられている神仏の相互関係や勧請神全体の構造自体、いまだに解明されていない。

本研究では、起請文に記載された神仏のうち、特定の地域や家に限らず全国の起請文に確認できる梵天・帝釈、「日本国中大小神祇」といった日本神祇を包括する文言、そして八幡・天満など日本の主要な神仏を対象に、これらの神仏がどのように選択・配列されていたのかを明らかにする。事例として、武家からは中国地方の毛利氏と九州地方の島津氏を、寺院からは京都の東寺を取り上げ、上記神仏の記載についてのそれぞれの特徴や時期的変遷を明らかにする。そして武家間の比較や武家・寺院間の比較を通して、地域・家・身分による相違や、当該期社会全体の共通認識についても検討する。これらを通して、当時の誓約と神仏とがどのように関連していたのかを読み解いていく。

## 個人研究

### 中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究

研究代表者・任期制助教 野村 実  
(社会学・地域交通論・地域社会学)

中山間地域においては、バスやタクシーなどの地域公共交通の事業者は、運転手の減少や高齢化もさることながら、需要低減によって路線やサービス縮小を余儀なくされている。したがって高齢者等の地域住民にとっての「生活の足」は自家用車あるいは家族による送迎に頼るほかなく、その代替手段を持たない状況にある。また、近年では、地方部に限らず高齢運転者による重大死亡事故の発生と、これによる運転免許返納に関する議論が取り沙汰される一方で、地域課題に即した柔軟なモビリティ（移動手段）確保策が政策的に展開されているとは言い難い。

一方で、同じように中山間地域に位置し、高齢化や人口減少の進んでいる地域でも、アクターが自発的に解決に取り組もうとするケースや、新たなモビリティ事業の実証実験の対象となっているケースもあり、地域ごとに課題やニーズは大きく異なっている。そこで本研究では、中山間地域における移動・交通問題の実態を把握した上で、高齢者等の住民のモビリティ確保に向けて、どのような実践と政策が求められるのか、各地域でのケーススタディから明らかにすることを試

みる。

具体的には、①生活課題の把握、②自発的な実践のプロセス、③新たなモビリティの政策展開という3つの視点から、中山間地域のモビリティ確保策という主題にアプローチし、他地域への政策的・実践的示唆と、モビリティに起因する諸課題の解決方策の導出を目指す。特に、京都府内の中山間地域における自家用車を用いた公共交通（自家用有償旅客運送）の取り組みに着目し、ウーバー（Uber）アプリを活用した京丹後市の「ささえ合い交通」や、府内の北部と南部で実証実験が行われている“MaaS”の展開から、住民等の取り組む小さなモビリティが、鉄道やバスという基幹交通をどのように補完するのか、ケーススタディから把握し、地域のアクターへの具体的な提案や政策提言につなげていく。

## 個人研究

### 新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究

社会学部 講師 大原 ゆい  
(社会学)

不登校やひきこもり、子どもの貧困やホームレス問題など、複雑化・複合化する現代の社会では、そこで生じる福祉問題もまた広がりや深まりをみせている。このような問題（本研究では「今日的な福祉問題」とする）は、制度の狭間にあり、従来の社会福祉制度や支援の枠組みだけでは問題の所在や、解決のための道筋を見つけにくいという特徴を持つ。本研究のキーワードである〈よりそう支援〉は、このような問題に対して、当事者ととも状況分析し、一緒に考え、行動し、必要に応じて社会資源を作り出し、社会変革をも視野に入れた実践家による実践のことである。

本研究では、ドナルド・ショーンの提起する「省察的実践者」という専門家像を手がかりに、〈よりそう支援〉が対象とする問題状況や、誰がどのような社会資源を用いて実践に取り組んでいるのか、また従来の社会福祉の支援スタイルとの相違点を明らかにする。今日的な福祉問題に取り組む実践を〈よりそう支援〉として位置付けて構造分析することは、新たなソーシャルサポートの担い手像を明らかにするとともに、現代社会からの要請に応じた実践家の養成をも可能にすると考える。

本研究は、「〈よりそう支援〉という実践スタイルが

活動領域を広げている社会的な要因、経済的な要因は何か。また、実践を担っている人はどのような背景を持っており、なぜ彼らは〈よりそう支援〉という実践スタイルをとるのかを問うものであり、具体的には、1年目と2年目には、今日的な福祉問題に取り組む実践の実態把握および、テキストマイニングの手法を活用したインタビューデータの分析を行う。さらに3年目は、1年目と2年目の研究成果をふまえ〈よりそう支援〉を担う実践家の養成プログラムを提案する。

### 個人研究

## 真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究

研究代表者・特別研究員 本林 靖久  
(宗教人類学)

日本民俗学では、浄土真宗の篤信地域を真宗独自の世界と捉え、真宗門徒の民俗は民俗宗教における固有性を持たないものとして研究対象から外されてきた。

本研究では、真宗地域の伝統的な村落社会に特有に見られる、石塔を持たない習俗（無墓制）や墓地に木を植える墓上植樹の習俗などの葬墓制を、真宗門徒の特殊な民俗儀礼と捉えるのではなく、日本人の宗教文化の総体として考察を試みる。そこで、真宗地域の葬墓制研究を、真宗門徒も日本民俗学における常民という観点に立って、日本人の宗教民俗との比較のなかで、真宗民俗の特殊と普遍、信仰の中心と周縁、門徒の教義的浄土観や民俗的他界観といった多様な局面の複合性の実態を一方に偏らず調査・分析をしていく。

真宗門徒の墓の習俗は、現状の民俗学の視点から捉えると特殊な事例となる。民俗学における墓制の分類においては石塔建立が何よりも重要なメルクマールとなっているため、「詣り墓」としての樹木は想定されていない（新谷尚紀、1991）。しかし、石塔のみに限定化してしまうことは日本の墓制の歴史的な変遷を説明するうえで矮小化してしまう恐れがある。石塔を持たない無墓制の習俗や墓と樹木の関係を研究することは、日本人の死をめぐる宗教文化への理解を深めるうえで意義あるテーマである。

したがって、真宗地域の葬墓制を特殊として見るのではなく、中世から近世にかけての日本人の通底した基層文化のなかで、残存する真宗民俗の墓制であること、真宗の教義とのなかで民俗に即応する創造的な真宗民俗の墓制であることが、従来の真宗地域の民俗研

究とは異なる独自性のある研究となる。

そこには、真宗地域の葬墓制の調査研究は墓を持つことを当たり前と考えている現代の日本人にとって、「墓とは何か」を問い直す契機となり、日本人の墓に対する新たな関わり方を提示するという現代民俗学の可能性にも寄与することができる。

### 個人研究

## 近世における『教行信証』の創造的解釈 —智暹『樹心録』の研究—

研究代表者・PD 研究員 青柳 英司  
(真宗学)

浄土真宗では、東西本願寺に学寮が整備された17世紀以降、大規模で公開性の高い教学の研究が始まった。これによって、従来の口伝による教学（相伝教学）からの脱却が図られ、近世真宗教学（いわゆる江戸宗学）の構築が進むこととなった。近世の学寮では親鸞の著作や親鸞が重視した仏教文献等の注釈が多く行われ、その成果は現代の真宗教学においても多大な影響力を有している。

その中でも浄土真宗本願寺派の学僧・智暹（1702-1768）の『教行信証文類樹心録』（以下『樹心録』）は、以後の『教行信証』解釈の基軸を作った著作であると言える。本書は親鸞の主著とされる『教行信証』の注釈書だが、従来の理解とは異なる創造的な解釈を次々と提唱し、後の『教行信証』研究に大きな影響を与えている。たとえば『樹心録』は、『教行信証』の構造を前五巻と後一卷に分けて理解している。そして、前五巻は真実の巻であるが、後一卷は方便の巻であり、最終的には捨てられるべきものであるとした。これは「真仮科」と呼ばれるもので、現在においても一定の支持を得ている構造理解である。

このように智暹の思想の特徴は、真実とそうでないものとを、明確に分けようとする点にあると言える。智暹がこのような思想を持ち得た背景としては、当時の真宗教団が他宗の仏教者からの批判に晒されており、これに応答することが喫緊の課題であったからだろう。つまり『樹心録』が新たな『教行信証』の解釈を創造したのは、当時の思想状況に合わせた『教行信証』解釈が必要であったからであり、その解釈自体が近世仏教思想の1つの展開であると言えるものである。しかし、このような視点からの研究は、これまでほとんど行われてはいない。

そのため本研究では、『樹心録』の解釈が成立する思想的背景と、智暹の問題意識とを明確化し、さらにその後の近代真宗教学の成立に与えた影響を探ることまでを視野に入れる。これによって、現代の『教行信証』研究を問い直す、新しい視座が得られると考えられる。

## 個人研究

### 近代日本における教祖像形成 に関する総合的研究 —最澄・空海・親鸞・日蓮—

研究代表者・PD 研究員 大澤 絢子  
(宗教学・近代宗教学)

本研究の目的は、近代日本における教祖像の展開プロセスの解明である。そのために本研究では、明治から昭和期に刊行された教祖たちの史実を検証した歴史研究と、同じく教祖たちを題材とした文学作品の相互関係の有無を言説分析によって検証する。考察対象とする宗祖は、日本の教祖のなかでも際立って多くの伝記が作成される一方、歴史研究による史実の検証も積み重ねられてきた最澄(766/767-822)・空海(774-835)・親鸞(1173-1262/1263)・日蓮(1222-1282)である。本研究は、彼らの人物像形成における史実と創作の相互作用に着目することで、実証主義的な近代歴史学が発達すると同時に、小説や雑誌を含む大衆メディアが一般化していく近代日本において、平安・鎌倉仏教を代表する教祖イメージが形成されてきた意義を解き明かす。

関連する先行研究として、歴史学と文学の相互関係を取り上げたヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』(原著1973年)があり、文学分野では、尾崎秀樹『歴史文学論』(1976年)や菊地昌典『歴史小説と何か』(1979年)によって、読者の側が作家や研究者たちの歴史上の人物像形成に及ぼす影響が指摘されている。しかし、日本宗教史の枠組で史実と創作双方の関係性から教祖像の形成を課題とした研究はほぼ皆無である。

西洋の影響を受けて成立した明治期以降の歴史研究と、同じく近代に登場した大衆文学は、どちらも歴史上の人物を扱うものでありながら、実像と虚像という点で相反するものとされてきた。本研究はこの対立軸を問い直し、「歴史研究→文学」という一方的な関係だけでなく、「文学→歴史研究」の方向性も考慮した上での考察を行う。本研究を通して、近代日本におい

て教祖のイメージが学問的な問題を超越して、教団とは一線を画したアカデミズムや一般社会との関係のなかで再編成されていく実態を明らかにする。

## 個人研究 (予備研究)

### ASEAN サッカーのグローバル化 に関する社会学的分析

研究代表者・教授 阿部 利洋  
(社会学)

ASEAN を構成する国々は、経済発展の段階や政治・社会体制、人口規模の点において様々な違いがあるものの、サッカーについては地域的な共通性を見出すことができる。それは主として、(1) 国代表のレベルはグローバルな基準からすれば相対的に低い(FIFA ランキングではほぼ100位以下)にもかかわらず最も人気のあるスポーツとなっており、とりわけ代表戦への社会的関心・動員規模が大きいことと、(2) レベルアップのために海外上位国の知見・人材等を取り入れる動きと、自律的・主体的発展を求める志向とのバランスが各社会の課題となっていることである。いわば、各社会に独特の方法で「グローバルな文脈に開きつつ閉じる」取り組みが行われているのであり、その実態を把握することが本研究の第一の目的である。具体的には、選手のみならずコーチ・監督や協会関係実務への外国人専門家の参入、自国にルーツを持つ海外出身選手や帰化選手の代表招集、海外上位国リーグ・協会との連携(Jリーグ含む)、外国企業のスポンサー獲得などに対して、社会的にどのような意味付与が行われ、どのような対応が図られているのか、現地調査を通じて明らかにする。本研究のもう一つの目的は、ASEAN 地域の相互関係や凝集性の媒体としてサッカーが機能している状況を分析することである。2019年6月のASEAN 首脳会議で公表された2034年W杯の共催誘致構想は顕著な例であるが、その背景としては、同地域を対象とするサッカー大会(ASEAN杯、メコンクラブチャンピオンシップ、東南アジア競技大会)が大きな関心を喚起してきた経緯や、各国の上位クラブによるASEAN スーパーリーグ構想の立ち上げ(2015年)などがある。言い換えれば、ASEAN 地域の社会同士がどのような相互関係・相互認識の中で「自分たちのゲーム」を共有しているのか、分析するということである。

### 個人研究（予備研究）

## 浄土真宗寺院における 布教テキストとしての 由緒書の基礎的研究

研究代表者・准教授 川端 泰幸  
(日本中世史)

本研究では、従来2次的な史料としてその史料価値をあまり認められず、活用されてこなかった寺院の由緒書に着目する。この背景には、近年、特に日本近世史において、由緒書や偽文書といった史料が、そこに記された内容が史実であるか否かにかかわらず、現実社会において、重要な役割を果たしていたという評価がなされつつあるという研究動向がある。このような研究動向を踏まえて、あらためてみると、寺院由緒書も同様の役割を果たしていたことがわかる。

戦国期から近世にかけて、各宗派の寺院において、さかんに由緒書が作成された。とくに浄土真宗においては、各地の寺院において、開基伝承や法宝物が伝来したことの由来、「石山合戦」への参戦物語など、多くの「記憶」が盛り込まれた由緒書が作成され、現在に伝わっている。そして、これらの由緒書は秘蔵されるものではなかった点が重要である。由緒書は参詣者や地域の門信徒に対して、折々に読み聞かせられることで、寺院だけではなく、そこに集う人びとの中に由緒書に語られる「記憶」が共有されるのである。そうすることで宗教共同体としての教団への帰属意識が強まるとともに、信仰を篤くすることにつながるのである。本研究は、そのテキストである実際の「由緒書」を調査収集し、翻刻と内容分析を加えることで、作成過程や活用の実際、由緒書が現実にも与えた影響を明らかにしようとしている。

具体的には、①すでに収集している由緒書の翻刻と内容分析を進める。それとともに、②由緒書を現在に伝えている複数の真宗寺院の調査を実施し、そのテキストの内容比較や、現実にも与えた影響について考察をしたい。ただし、②の寺院調査について、新型コロナウイルス感染症の収束状況により実施困難な場合が予想される。その場合は、①を中心に進めることとする。

### 個人研究（予備研究）

## 在朝鮮日本人画家加藤松林人の 阿南市所蔵作品と遺稿 に関する研究

研究代表者・教授 喜多 恵美子  
(韓国・朝鮮美術)

植民地期朝鮮で活動していた日本人画家加藤松林人(1898-1983)は朝鮮美術展覧会の参与をつとめ、当時の朝鮮画壇を代表する画家の一人として認識されてきた。美術界にとどまらず朝鮮総督府や言論人、財界人ともつながりのあったことから相応の影響力があつたはずなのだが、加藤を本格的に扱った研究はほとんどなされていないのが現状である。本研究では、加藤の故郷である徳島県阿南市に所蔵されている遺稿と作品の整理と分析を通じて、植民地期朝鮮の画壇における日朝間の人的交流、物的交流について考察し、在朝鮮日本人画家加藤松林人がどのような活動をしてきたのかについて明らかにする。加藤は当時の朝鮮画壇の状況についても記録を残しており、これ自体、韓国・朝鮮美術史研究において貴重な一次資料となる。

また、植民地期に朝鮮に居住していた日本人の戦前と戦後がどのようにつながり、その活動がどのように変化していったのかを分析するうえでも加藤の残した記録は重要である。加藤直筆の遺稿以外にも、新聞雑誌に寄稿した文章や関係者にたいするインタビューなどを総合して、戦前戦後の活動と人脈に光を当てていく。

基礎研究として、徳島県阿南市所蔵の遺稿と作品データのデジタル化を計画している。阿南市とも相談をしながら、慎重に研究を進める必要があるのだが、本年度は新型コロナの影響により阿南市での調査が困難となることが予想されるため、これまでに入手できている遺稿のタイプおこしを中心とし、資料を分析していく。また、加藤が寄稿した雑誌記事についてはおおよそ把握できているが、新聞記事についてはまだ手つかずの状態なので、これについても調査・収集をすすめたい。

## 個人研究（予備研究）

# 自ら学び続ける教員養成 プログラムの構築 ～コーチングとリフレクションの 導入計画～

研究代表者・講師 谷 哲弥  
(理科教育)

教員志望学生は約1ヶ月の教育実習により、現場において教員としての資質を高める経験を積み重ねる。また4回生後期の教職実践演習では、教員としての資質を高め、現場での実践を想定した演習が行われる。

本演習の学級経営に関する講義で、担当した学生の多くは、「教育実習の際に、どのように児童理解をするのか、果たして自分にできるのか」という不安を感じ、どう解決すると良いのかという心配や迷いを持っている。そこで、「児童理解」をテーマに、学生が見てきた児童の行動を深く考えるリフレクション（省察活動）を試みた。これにより、学生達は自らの経験を集団で共有し、児童理解に対する学生なりの答えを導き出すことができた。加えて、コーチングの手法を取り入れ、具体的な声かけの仕方を探り、児童の自己有用感や学習活動に対する意欲を引き出し、高めることができるという手応えを得た。

4回生に限らず、3回生で学校ボランティア活動を継続している学生にも、児童と向き合う時に「児童理解とは」や「教員の適切な指導とは」という問いを感じていることから、リフレクションとコーチングという手法を用いることで、「児童理解とは」に対する一定の答えをもたらすものと考えられる。

よって、1回生から、リフレクションとコーチングスキルを高める取組を継続することで、多様な児童理解の経験値を持ち、教育実習に臨むことができ、幅広い実習経験を得ることになる。これを本学独自のプログラムとして構築することで、自ら学び続ける教員の養成を目指すことができる。これらのために本年度は次の計画を立案し実施したい。

- 1 学生を支援するコーチングの理論とその実践について調査分析を行う。
- 2 コルトハーヘン氏によるリフレクションモデルに関して調査分析を行う。

## 海外学会参加・研究調査報告

# 第5回 East Asian Environmental History 2019 大会参加報告

一般研究（井黒班）研究代表者・准教授 井黒 忍

一般研究（井黒班）の研究活動の一環として、2019年10月24日(木)から同月27日(日)にかけて台湾の国立成功大学（台南市）にて開催された第5回 East Asian Environmental History 2019大会に参加し、研究報告を行った。あわせて関連する報告を聞き、討論に参加するなどして、最新の成果を吸収することができた。この大会では、経済史を専門とする著名な研究者である濱下武志氏による基調講演のほか、土地利用、公害、動物、海洋資源、疾病・医療、森林、災害、水利用、エコロジー、植民地と環境といった各テーマにそって、多くのパネルが立てられ、3日間にわたって熱心な議論が展開された。私は10月27日のパネル「水と社会との関係」の中で、「近代中国における水利会社の出現」と題する報告を行った。報告の概要は以下の通りである。

山西省北部（以下、晋北と呼ぶ）は、遊牧世界と農耕世界が交錯する農牧接壤地域に属し、古来より多様な遊牧集団が角逐、興亡を繰り返した舞台であった。一方で、遊牧民に対する防衛上の理由から、さらには深刻な水不足という環境条件のため、農業開発は遅々として進まなかった。17世紀に至ると、モンゴル高原が清朝の支配下に置かれたことから北方防衛の必要性は減少し、流入人口も増加したが、それでもなお当該地域の水不足は開発の進展を阻害する要因であり続けた。水供給の安定を実現し、生産性を維持・向上させるためには、灌漑の整備と水資源の管理が不可欠であった。

前近代の晋北における水資源の管理主体としては、個別村もしくは複数村が連合した村落連合、それらを単位とする水利組織、村を代表する有力宗族などが挙げられ、水冊にまとめられた伝統的な規約に基づく運営がなされてきた。20世紀の初頭、新たなステークスホルダーがこれに加わることとなる。個人および複数人の資本によって設立された株式会社の形態を取る水利会社の出現である。

清朝末期には、製造業および金融業の方面において

さまざまな形態の株式会社が全国に設立された。これは義和団の乱とこれに続く八カ国連合軍の北京占領を経て、衰退した国家経済を立て直し、軍の強化を実現するため、西洋式の改革を導入し、経済政策を積極的に推し進めようとした清朝政府の方針によるものであった。法制面においても整備は進められ、1904年に公司律が制定され、これは清朝滅亡の後、北洋政府によって1914年の公司法として拡大・整備されることとなる。

著名な政治家であり、起業家、教育者としても知られる張謇は、清末において最も早く水利会社を設立した人物の一人である。彼によって1909年に設立された江南水利会社は、淮河流域の治水と水運を主たる業務とし、両江総督の張人駿ら有力官員の強い後押しによって成立した全国的に著名な企業であった。一方、これとはほぼ同じ頃、晋北においても灌漑を主たる業務し、株式会社の形態を有する複数の水利会社が設立されていた。江南水利会社とは異なり、全国的にはほとんど無名に等しかった晋北の水利会社だが、灌漑用水の供給を目的として治水および水利施設の建設を推し進めるだけでなく、施設完成後においても水路の維持・管理を継続して行うなど、当該地域の水資源開発に大きな役割を果たした。この水利会社の事業を通して、長らく開発が遅れた晋北地域における灌漑の整備と土地の改良といった諸事業が積極的に推し進められていくこととなったのである。

黄河中流部に位置する山西省は、年間降水量500mmほど、その60~70%は夏期に集中するなど、華北地域の中でもとりわけ深刻な水不足問題を抱える地域である。中でも、晋北、あるいは雁北と呼ばれる山西省北部に位置する大同盆地は、北は内モンゴルに通じ、残る三方を高山に囲まれ、桑乾河と滹沱河の二大河川がその間を流れるものの、山西省内において最も深刻な水不足に悩まされる地域であった。光緒33(1907)年、ここに初めて初めて灌漑を主目的とする水利会社-朔県六合水利股份有限公司が設立された。

さらにその後、朔県広裕水利股份有限公司、山陰県富山水利股份有限公司、応県広済水利股份有限公司などが1910年から1913年にかけて相次いで設立された。これらの他にも、桑乾河と滹沱河の流域に大小さまざまな規模の水利会社が設立されたことが確認できる。両河川の流域には乾燥と水不足に原因する荒蕪地と砂質土壌、アルカリ土壌地が広がっており、清朝政府による農業開発策も効果を上げることなく、20世紀初頭に水利会社が設立されるまで、ほぼ旧態依然とした状況におかれていたのである。

朔県六合水利股份有限公司は、監生や教師、大地主、富商など地元の名士であった齊爾昌や曹普、姚明、曹熙、熊肇祺、尹模医らによって設立された。この企業は、桑乾河支流の恢河にダムを建設するとともに、全長25キロメートルの水路を開削して、33の村々、127平方キロメートルの土地に灌漑用水を供給した。また、朔県広裕水利股份有限公司は、1910年に劉懋賞や鄭平甫、蔚大海らによって設立された。この企業も恢河の水利開発に取り組み、ダムの設置と水路の開削を通して、30の村々、133平方キロメートルの土地に灌漑用水を供給した。設立者の一人である劉懋賞は、民国初期の著名な政治家、起業家であり、山西大学に学んだ後に日本にわたり明治大学に留学した。日本においては中国同盟会に参加し、帰国後には臨時参議院議員を務めるなどしたが、袁世凱が中華民国臨時大総統の任に就くと、故郷である山西省へ戻り、朔県広裕水利股份有限公司や朔県六合水利股份有限公司の設立に携わるなど、起業活動を積極的に進めていくこととなる。

劉懋賞は山陰県富山水利股份有限公司の設立にもかかわらず、梁万春、羅彦斌、劉政らとともに桑乾河流域の水利開発に尽力した。これはもともと山西省議会議長を務めた杜上化が唱導した事業であったが、劉懋賞は協力者としてこれを実行に移すこととなる。しかしながら、土製ダムの建造に必要な技術力が不足していたため、ダムはその脆弱性を露呈し、事業は暗礁に乗り上げることとなった。そこで、劉懋賞は優秀な水利技術者として知られた王同春に事業への協力を依頼する。王同春はすでに後套平原における黄河の水利事業に成功を収め、さらに当時、張謇の依頼によってアメリカ人およびベルギー人技術者とともに淮河流域の現地調査に当たっていた。劉懋賞は王同春の技術的支援のもとに桑乾河流域での水利事業を推進していくこととなるのである。

晋北の水利公司の中でも、その設立者の面でもとりわけ目を引くのが1913年に設立された応県大応広済水利股份有限公司である。そこには黎元洪や閻錫山とい

った錚々たる軍閥政治家らが株主として名を連ねていた。彼らの潤沢な資本に基づき設立された同水利公司は、役員会にあたる董事会の主導のもと、桑乾河支流の恢河の水利開発を推し進めていく。その結果、当該地域の水利事業は山西省内でも最高のレベルにまで引き上げられた。しかしながら、後に1920年代になると閻錫山が大株主として徐々に同会社の経営に介入を強めていき、最終的には株主それぞれの持ち株数に応じて会社の土地を私有地として分割するという提案が認められることとなる。同水利公司は日本軍の侵略と占領という危機的状況を迎える1940年代まで命を永らえることとなるが、その企業としての実質はすでに1920年代以降、大きく変容していたのである。



成功大学



報告中（井黒）の様子

# フランスにおけるキリスト教、イスラーム、ユダヤ教の社会的影響力とその意義の調査

元東京分室 PD 研究員 西村 晶絵

2019年12月27日、28日、および2020年1月1日に、フランス・パリにおいて行った本出張は、キリスト教・イスラーム・ユダヤ教それぞれが、19世紀末から現代に至るフランス社会のなかで示してきた影響力とその意義を明らかにすることを目的としたものである。カトリックという圧倒的多数派を示す宗教に対して、ユダヤやイスラームといった少数派の宗教がいかに対峙してきたのかを検討することで、カトリック教会とナショナリズムの結びつきや、宗教によって助長される様々な差別意識誕生の背景を検討することを目指した。期間中は、フランス全土で行われていたストライキの影響により、調査が十分に行えない日もあったが、以下に主な活動内容を報告する。

12月27日、28日：19世紀末から第一次世界大戦へと向かう世論に大きな影響を与えたフランス・ナショナリズムの特徴を探るため、フランス国立図書館において、カトリック教会と結びつきながらナショナリズムを煽った極右政治思想団体アクション・フランセーズと、その中心人物であるシャルル・モーラスに関する資料の閲覧・複写を行った。モーラスは近年少しずつ研究が進んできているが、日本国内では入手不可能な資料が多いため、近刊の先行研究をフォローする良い機会となった。今後は、アクション・フランセーズの機関紙などから、カトリック教会とアクション・フランセーズの共闘関係の様相をより明らかにしていきたい。

12月29日：パリのユダヤ人地区にあるシヨア記念館で、アクション・フランセーズ台頭以降のユダヤ人の社会的状況を調査する予定だったが、ストの影響で断念せざるを得なかった。

1月1日：奇跡のメダル教会にて10時から行われたミサに参加した。聖職者や信者の構成員は様々で、多民族国家としてのフランスを象徴するように思われた。また、敬虔な信者たちが集い、神への祈りを捧げる様から、ライシテ（脱宗教化、世俗化）が強調されて久しいフランス社会の中で、宗教が人々の精神的な生活において果たしている役割が依然として重要なものであることを実感した。

その後、イスラーム系移民の人々にとって重要な拠り所であるモスクに移動し、内部を見学した。モスクは一般に公開されており、開放的で穏やかな雰囲気は漂っていたが、「モスク＝閉じられた空間」というイメージにより、イスラームの保守性、閉鎖性の象徴とみなされることも多い。実際に足を運んだことで、モスクを巡る現実とイメージの乖離を感じる経験となった。

フランスでは、第二次世界大戦までの社会における「異質な存在」はもっぱらユダヤ人であり、彼らとの



奇跡のメダル教会のミサの様子



モスクの内部。この奥は信者だけがアクセスできる祈りの場となっている。



関わりの中でナショナリズムの議論も形成されてきた。だが、20世紀後半からはその対象がムスリムに入れ替わり、カトリック的な価値観、ライシテの原則などから、結果的に差別が引き起こされている。ユダ

ヤ人とムスリムの置かれた立場の類似や相違点も明らかにしつつ、諸宗教の共生に向けたフランスの取り組みについて、今後さらに検討していきたい。

## アクション・フランセーズに関する 資料調査 (フランス・パリ)

元東京分室 PD 研究員 西村 晶絵

2019年12月29日から31日にかけて、フランス・パリにおいて、19世紀末から20世紀初頭にかけて社会的影響力を持った極右政治思想団体アクション・フランセーズと、19世紀末から20世紀半ばにかけて執筆活動を行ったアンドレ・ジッドに関する資料収集と文献調査を行った。アクション・フランセーズの創設に関わったモーラスの著作や、モーラスの思想に関する先行研究、フランス国立図書館に所蔵されているアクション・フランセーズの機関紙のマイクロフィルムを閲覧・複写したうえで、その内容からジッドとの関係性を考察することを目論んでの出張であったが、12月初旬からフランス全土では年金改革に反対するストライキが起こっており、一部予定の変更を余儀なくされた。調査実施日の内容と詳細は以下の通りである。

29日：本来、この日は共同研究として、ショア記念館においてフランス社会でのユダヤ人の様々な状況を、19世紀末から第二次世界大戦に連なる社会状況を踏まえて検討・調査する予定であった。しかしながら、ストの影響で交通機関の麻痺が著しかったため、ホテル近くの本屋で、個人研究に関わる資料の収集を行った。近年刊行されたジッドの書簡やドレフュス事件を巡るゾラのテキスト、アクション・フランセーズのモーラスについての研究書、カトリック教会がフランスの歴史において果たしてきた役割をまとめた文献を購入した。ドレフュス事件を巡る左派(ゾラ)と右派(モーラス)それぞれの立場を理解するための手がかりとなる資料を入手できたことは、個人研究を遂行するための足掛かりとなるものであった。

30日：フランス国立図書館の開館時間(14時～)までの間、パリ5区に位置するサン・ミシエルの書店Gibert Josephにて資料収集を行った。アクション・フランセーズおよびモーラス関係の資料を中心に、図書館で閲覧しきれなかったものを購入した。アクション

・フランセーズの思想的変遷や、社会的影響力についてまとめた文献を入手することができた。

14時に国立図書館が開館してからは、最新のジッドの研究書、論文を中心に複写・閲覧した。日本国内に所蔵のないジャーナルを入手できたのは大きな収穫であった。その一方で、アクション・フランセーズに関するマイクロフィルム資料はストライキの影響で閲覧することができなかった。本出張はこの資料を閲覧することが一番の目的であったが、果たせず残念であった。

31日：前日と同じく、国立図書館において、資料の閲覧・複写を行った。この日もマイクロフィルム資料の閲覧は不可能であったため、引き続きジッド関係の資料を収集した。著名なジッド研究者たちの最新論文に目を通したところ、アクション・フランセーズとの関係性に言及したものは存在するものの、そこに焦点



入手した資料の一部。

を当てた研究はいまだなされていないことが明らかとなった。今後、自分が研究成果を公表することで、ジッダの政治的・宗教的思想の独自性を明らかにできるとの確信を深めることができたのは良い収穫であった。

以上のように、今回の出張は、アクション・プランシーズ関係のマイクロフィルム資料を閲覧することができなかったことなど、当初の目的を果たせない部分も

多かったが、その反面、最新の先行研究を渉猟する機会ともなり、自身の研究の方向性や展開の可能性を確認することができた。今回の出張で入手することができた資料を今後より綿密に分析しつつ、さらには新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着いたところに、改めてマイクロフィルム資料を閲覧する機会を設けることで、自身の研究テーマを着実に進展させていきたい。

## 終末期医療の法制度をめぐる最新の資料調査の報告 －台湾の「患者自主権利法」施行一周年の現状と課題－

東京分室 PD 研究員 鍾 宜銓

2019年1月に施行された台湾の「患者自主権利法」が、2020年1月6日に満一周年を迎えた。昏睡状態、植物状態、重度の認知症、難病患者など、終末期患者以外の患者にも延命治療および人工水分・栄養補給の差し控え・中止を認めたアジア最初の法律である同法では、施行一周年を迎えた今、一般市民の認知度や臨床現場の実践などに様々な課題が浮上している。ここでは、台湾の「患者自主権利法」の施行状況とその課題について、2020年2月の現地調査で得た成果を踏まえて、以下のように報告する。

まず、同法の施行状況について、同法では、判断能力のある成人であれば、医療機関でアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning、以下、ACP）という、最期のあり方をめぐって医師、看護師、ソーシャルワーカーからなる ACP チームによるカウンセリングを受けてから、延命治療および人工水分・栄養補給の差し控え・中止に関する事前指示書を作成することが認められた。その作成状況について、2020年2月現在、事前指示書を作成した人数は12,120人に過ぎず、成人人口の0.6%を占めている。また、作成した人のうち、特定の疾病に罹っておらず、健康な状態の方が全体の8割以上を占めたことに対し、入院患者や慢性病などすでに医療を利用している者が ACP を受けるケースは少ない。事前指示書の作成人数が少なく、また健康な状態の人に集中している理由として、患者自主権利法に対する一般市民の認知度はまだ低いことと、慢性病の患者や入院患者に対する ACP のサポートが不足していることがあげられる。

次に、臨床現場の実践に関しても、資源の配分によ

る医療格差の問題が浮き彫りになった。それは、事前指示書の作成に不可欠な ACP 体制について、都市部と地方の間に格差が存在していることである。上記のように、ACP チームには専門の医師、看護師、ソーシャルワーカーが必要となる。医療従事者が不足している地方病院においては、ACP チームの数が不十分のため、ACP の予約枠が少なく、ACP を受けるための費用も都市部より高額である。そのため、事前指示書の作成を希望する人が都市部に行かないと作成できない、大きい経済的な負担を強いられるような事態が生じてしまう。

最後に、現代社会における家族形態の多様化も、新しい課題をもたらした。同法では、ACP を受けるには、本人以外に、少なくとも二人以上の証人が必要であり、そのうちの一人は二親等以内の親族でなければならないと規定している。これは、最期のあり方に関する本人の考えをなるべく家族内で共有し、家族で最後までサポートしていくという趣旨で定められた条文であるが、臨床現場では、親族と別居していることや ACP の実施時間に参加できる親族がいなかったため、事前指示書の作成に断念した希望者も存在している。同居人または友人の参加のみでの ACP を認めない同法の規定は、家族形態の多様化に対応しきれていないと批判されている。また、介護保険制度の実施と外国人ヘルパー制度の導入によって、かつて家庭内で行っていた家族への介護活動も、介護施設の職員や同居するヘルパーが担うことになりつつある。家族形態の多様化と介護の担い手の変化に伴って、ACP に参加すべき関係者の性質や、ACP における親族の役割についてさらなる考察が必要である。

台湾の患者自主権利法の施行は、終末期医療における患者の自己決定権の向上に大きな一歩をもたらしたものの、上記のような課題も存在している。今回の現地調査は、同法の現状と課題の解明に集中したものであるが、同法を通して明らかになった医療格差の問題や家族の役割の変容は今後の課題として引き続き研究を行う。



患者自主権利法に対する市民の認知度を向上するために、台北市立病院が設計した ACP 人生ゲーム

## The Lumbini International Research Institute (LIRI) 主催の国際会議への参加

デジタル・アーカイブ資料室 嘱託研究員 清水 洋平

2020年2月18日から22日にネパール：ルンビニーで開催された LIRI International Conference に出席した。世界のパーリ仏教研究を牽引する一翼を担うこの国際会議において、今回は、同会議の主催者から、大谷大学が所蔵するタイ王室寄贈とされる貝葉写本（「大谷貝葉」）を含む、東南アジアのパーリ語貝葉写本研究についての報告をしてほしいとの依頼を受けての参加である（デジタル・アーカイブ資料室の舟橋智哉嘱託研究員を同行した）。

初日は、LIRI のディレクターである Christoph CUEPPERS 氏の挨拶・研究発表を皮切りに、以下の研究発表がおこなわれた。

- ・ Basanta BIDARI (Archaeologist, LDT) :  
"Aśoka Pillars in the Tarai of Nepal"
- ・ Ven CHONGDOK [Cheonghwan Park] (Professor, Dongguk University, Seoul, South Korea) :  
"A study on the 'Pubbakammāpiloti'"
- ・ Fanindra NEUPANE (Principal, Central Campus, Lumbini Buddhist University, Lumbini, Nepal) : "Understanding Cognitive Process through Abhidhamma"
- ・ Kyungrae KIM (Assistant Professor, Department of Buddhist Studies, Dongguk University, Seoul, South Korea) : "Mind and Objects in the Vimuttimagga: An examination of *jiā* and its Pāli correspondence"

2日目は以下の研究発表がおこなわれた。

- ・ Claudio CICUZZA (Associate Professor, Web-

ster University, Hua Hin, Thailand) : "Peculiarities and significance of Pāli texts from Central Thailand"

- ・ Trent WALKER (Khyentse Foundation Postdoctoral Fellow, Dept. of Thai, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand) :  
"Reading Pāli in Early Modern Siam: Interlinear Annotations of Curricular Manuscripts"

3日目は以下の研究発表がおこなわれた。

- ・ Soonil HWANG (Professor, Dongguk University, Seoul, South Korea) : "Buddha and his two nirvānas"
- ・ Gregory KOURILSKY (Associate professor, École Française d'Extrême-Orient (EFEO), Paris, France) : "From and Beyond the *Vinaya*: Insight into the Buddhist legal literature of Northern Thailand and Laos"
- ・ Javier SCHNAKE (EFEO) : "Systems of numerical notation in Pāli Buddhism"
- ・ Yohei SHIMIZU (Research Scholar, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, Kyoto, Japan) : "A Study of the *Sabbādāna-ānisaṃsa* - Merit-making in Thailand: The Significance of the *Ānisaṃsa* Literature -"
- ・ Ven BEOPJIN [Daegong Kang] (Visiting Researcher, Institute of Thai Studies, Dongguk University Seoul, South Korea) : "Bowls of the Buddha in the Hindu Pantheon"

各自の1時間ほどの発表後には、それぞれ30分の質疑応答の時間が設けられており活発な議論がなされた。また参加者の多くから、日本に存在する東南アジア由来の仏典写本の情報整理の進展が望まれることや、「大谷貝葉」についての情報提供の依頼、並びに研究協力の申し出も受けるなどした。

今回の国際会議に参加し、世界の東南アジア仏教研究の動向を把握できたことや、海外で活躍しているパリー仏教研究者、東南アジア仏教の研究者と意見交換がおこなえたことは非常に有意義であった（発表者の一人である Trent Walker 氏からは、帰国後早々に「大谷貝葉」中の難解文章の読解に有益な情報の提供を受けた）。

なお、今回は、ネパールからの帰国時にタイ：バンコクに一泊し、タイ国に流布する仏典写本研究の専門家 Dr. Srisetthaworakul Suchada 氏（Head of Center for the Study of Ancient Manuscripts, Dhammachai Tipiṭaka Project, Thailand）とお会いし、「大谷貝葉」の奥書（コーム文字タイ語表記の箇所）に関する研究方法についての打ち合わせをおこなった。また、Suchada 氏に同行してもらい Wat Chakrawatrachawat 寺院も訪問した。同寺院を訪問した理由は、「大谷貝葉」の奥書に関わる今までの調査で、「大谷貝葉」の稀覯文献 Paññāsa-jātaka に関わる他寺院所蔵の同類写本（「大谷貝葉」中の欠損部分であり「大谷貝葉」と関係がある可能性がある）の奥書にこの寺院の名前が記されていることが判明していたからである。タイの仏典写本は、奥書に寺院名が記されていることは珍しいため、間接的ではあるが、同寺院を訪問し「大谷貝葉」との関わりを知る上での手掛かりとなる情報の収集に努めた。同寺院が所蔵する写本については、隣接するもう一つの寺院 Wat Bophitphimukni に移した可能性があることがわかり、こちらの寺院の調査の必要性があることを認識した。これら両寺院については機会を改めてさらに調査を実施したい。



研究発表の様子（筆者）

## 国内学会参加報告

# 全国大学史資料協議会 2019 年度総会ならびに 全国研究会・西日本部会第4回研究会に参加して

大谷大学史資料室 元嘱託研究員 松岡 智美

大谷大学史資料室では、2019年度後期は、東・西部会合同で行われる総会ならびに全国研究会と西日本部会の第4回研究会に参加する機会を得た。

全国研究会は10月16日(水)~18日(金)の3日間にわたって、立教大学を中心に開かれた。16日は、総会に続いて寺崎昌男氏(東京大学・桜美林大学・立教大学名誉教授)による「新制大学、それは何だったのかー生涯にまつわる光と影、そして残した課題ー」と題した講演を聞いた後、立教学院展示館にて東日本部会創立30周年記念展/立教学院展示館第6回企画展「『新しい大学』の誕生ー今日の大学の原点をさぐる」を観覧した。最終日18日には、学習院大学史料館およびキャンパス内登録文化財と日本女子大学成瀬記念館等を見学した。17日は、全国研究会が下記のプログラムで行われた。

1. テーマ発題 豊田雅幸氏(立教学院展示館 学術コーディネーター・学芸員)
2. 小枝弘和氏(同志社大学同志社社史資料センター 社史資料調査員)  
「収蔵資料に見る同志社の新制大学構想」
3. 岸本美香子氏(日本女子大学成瀬記念館学芸員)  
「新制大学誕生ー日本女子大学の場合」
4. 入江幸二氏(富山大学人文学部准教授、富山大学アーカイブ副室長)  
「新制富山大学の発足をめぐって」
5. 総括討論

今回の全国研究会では「新制大学発足をめぐる各大学の動向ーその資料と活用ー②」をテーマに、『研究所報』No.71で報告した2017年度に続く第二弾として、第一弾で未発表の事例のうち、1948年に認可された同志社大学、同年認可でかつ女子大学の日本女子大学、旧制高等学校等を母体とする地方国立大学で49年に発足した富山大学の3事例が報告がされた。

まず、小枝氏は、大学設置基準がまだ定められていないなかで新制大学構想を練ったことや戦前から戦後にかけての同志社大学とアメリカの関係等について報告され、次に、岸本氏は、日本女子大学の主流である

家政学を学部にする動きや大学設立基準設定協議会の女子大学分科会での活動を中心に報告された。最後の入江氏は、当初の四つの単科大学からなる連合大学案から「地域ごとに合併して一大学とする」という国の指針に従って総合大学案に変更したという認可申請の過程や当時のキャンパス問題について報告された。

第4回研究会は、12月6日(金)に広島県立文書館にて開かれ、「災害等の発生に伴う史・資料保護に関する相互協力協定書」を締結している広島大学文書館と広島県立文書館の事例を中心に、広島県を襲った豪雨災害から資料等を救出するための災害レスキュー活動について紹介された。広島大学75年史編纂室の石田雅春氏はレスキュー活動で直面した課題や相互協力協定の拡充等この活動から得た教訓等を報告され、広島県立文書館の下向井祐子氏は、「平成30年7月豪雨」時の広島県内各地の被災状況と文書の救出作業等について講演された。両氏からは、「キッチンペーパー新聞サンド」法や真空凍結乾燥等を用いた紙資料への応急措置の方法が示され、大変参考になった。その後、広島県立文書館の西向宏介氏の案内で、水損資料処置現場の荷解室と消毒室、書庫を見学した。

今後は、全国研究会に参加することによって新たに得られた視点を年史に取り入れるとともに、第4回研究会で話された平時における情報収集や事前の減災対策等を基に大学史関係資料の適切な保存方法を検討していきたい。



日本女子大学 成瀬記念講堂

## 歎異抄ワークショップ開催報告

### 第7回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員 Michael J. Conway

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定に基づく『歎異抄』翻訳研究プロジェクトが2017年度に始まり、それに基づいて今まで7回、ワークショップが開催されてきた。2017年から2019年の3カ年の3月には、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所が3日間のワークショップを主催し、本学から教員と公募に通った大学院生を派遣した。その例に則り、2020年3月6日(金)から8日(日)にかけて開催される予定の第7回『歎異抄』翻訳研究ワークショップに私と二人の大学院生が参加できるように準備が進められた。しかし新型コロナウイルスの急速な感染拡大に伴い、その予定が大幅に変更された。

例年、ワークショップに参加した学生の報告と所感を報告書の中で共有してきたが、ワークショップ開催前にカリフォルニア州北部におけるコロナウイルス感染拡大を受けてサンフランシスコ市に緊急事態宣言が出され、安全性が確保できないため、学生の派遣は急遽取り止めとなったため、本報告書には、日本からZoomを介して参加した学生の報告については省略して、実際にバークレーで参加した私が、どのような形でワークショップが開催されたかについて報告する。

報告者は、日本国内で感染拡大が大きく懸念され始めた2月28日(金)、異様に閑散とした関西国際空港より出国したが、その頃には日本における広範囲の危機意識と比して、アメリカではコロナウイルスは危惧されていなかった。その温度の差もあり、ワークショップの開催形態について出国前から日本の大学とホスト校との間に種々の議論が交わされた。日に日に緊張が両国で高まる中、3月3日(火)に当初の予定を変更し、日本からインターネットによる参加を可能にすることになった。

当初の予定では、3月6日(金)から8日(日)まで、3日間、カリフォルニア州バークレー市にある浄土真宗センターの講堂や教室において、午前10時から午後5時まで、『歎異抄』に対する江戸時代の講義録を翻訳する作業を小グループで行うことになっていたが、大

谷大学と龍谷大学が学生および若手研究者の派遣を取り止めただけでなく、アメリカ国内から参加申込があった研究者もコロナウイルスを懸念して参加を断念したことを受けて、浄土真宗センターに集まることのできた参加者のみによる開催が困難であるという判断に至った。時差に鑑みて、日本からのオンライン参加を可能にするために、日程を6日と7日の2日間に短縮し、そして開催時間を繰り下げて、初日は午後2時から9時まで、二日目は10時までに変更した。そうすることによって日本時間の翌日の午前8時から夕方までの開催となった。

浄土真宗センターでの参加者は20名弱で、バークレーにある米国仏教学院の教員と学生や北カリフォルニア在住の東西両本願寺の開教従事者がその大半を占めていたが、早くから渡米していた龍谷大学の大学院生や、感染が心配される中でボストンから来たハーバード大学の大学院生も参加していた。

オンラインの参加者は当初、浄土真宗センターに来ることを予定していたが、安全を考慮して参加を断念した約10名であった。公募によって本学から派遣する予定であった鶴留正智（大学院博士課程真宗学専攻第三学年・国際仏教研究補助員）は、真宗総合研究所内のパソコンを利用して参加し、澤崎瑞央（大学院博士課程仏教学専攻第三学年）は静岡の実家から参加した。ネット上で参加した者を含めると、例年通りの参加人数になる。

3月6日の午後2時から全体会が始まり、様々な技術的問題に対応しながらも、注意事項の伝達や全体の予定および目標を共有することができた。そこから4部会に分かれて、例によって翻訳作業に取りかかった。以前と同じようにマーク・ブラム教授（カリフォルニア大学バークレー校・国際仏教研究嘱託研究員）は円智の『歎異抄私記』を翻訳する部会の指揮をとり、嵩満也教授（龍谷大学）は寿国の『歎異抄可笑記』の部会を担当し、そして私は深励の『歎異抄講林記』を英訳する部会の責任者となった。また、了祥の『歎異抄』に対する注釈を英訳する部会も開催してきたが、今回は、桑原浄信（バークレー仏教会駐在開教

使兼浄土真宗本願寺派北米開教区浄土真宗センター出身)がその部会の取りまとめ役を務めて下さった。(これのみならず、桑原先生および浄土真宗センターのスタッフから Zoom 使用に際して多大なご協力をいただいたことに対して、ここで深い感謝の念を表したい。)

本プロジェクトにおいて取り扱っている注釈書は、『歎異抄』の原文について必ずしも均等に解釈を施していないため、各部会で翻訳する分量が大きく異なっている。その差を受けて、今回のワークショップでは今まで以上に各部会の間で進み具合の差が顕著に現れてきている。寿国と深励のグループでは第8条と第9条に対する注釈を翻訳し、それについて検討を加えることができたが、円智のグループは第10条にまで進んだのに対して、了祥の第7条の注釈を翻訳する作業がまだ完了していない。このようなバラつきをどのように克服していくべきかは、今後、大きな課題となるように思われる。

バークレー時間の7日午後9時頃に各部会での作業を切り上げ、今回のワークショップの成果を参加者全員と共有するために浄土真宗センターの講堂に集まり、全体会を開催した。本プロジェクトが全体の半ばを過ぎて、最初の頃に江戸時代の宗学の方法論などについて新しい発見が続出した時とは異なり、地道な翻訳作業を継続することを通して見えてきた課題が議論の中心となった。嵩先生からは、江戸期の中で、鎌倉期の親鸞の門弟について現在と大きく異なる捉え方がなされている指摘があり、またブラム先生からは『歎異抄』第10条の要となる「無義をもって義とす」という表現における「義」の訳語選びについて円智の解釈に基づく様々な提言がなされた。また、深励の『歎異抄講林記』における第8条の解釈において、存覚の立場を批判的に扱う記述が見られ、江戸期における存覚や覚如の位置付けについてより丁寧に考察する必要性を示す文章を紹介することができた。最初のワクワク感が薄れてきたものの、このような作業を進める大切さを実感させる成果が上がっているように見受けられる。

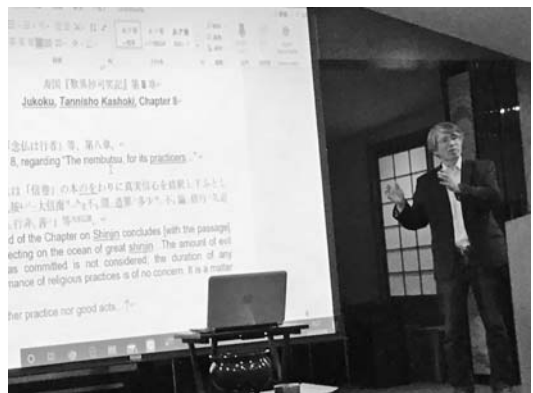
二日間を通じて、各部会で翻訳および翻訳確認作業を進めるために、約10時間を確保することはできたが、当初の予定より大幅に少なかったため、予定していた形で作業を進めることができなかった。その遅れに鑑みて、そして2020年6月に龍谷大学で開催する予定だった第8回ワークショップの延期を受けて、現在では、三者の研究機関の間で本プロジェクトのスケジュール全体を変更するために協定書の改定に向けて調整している。

以上のように第7回の『歎異抄』翻訳研究ワークショップが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けながらも、開くことができ、制限されていた中でその状況に見合った成果を上げるようになった。新型コロナウイルスの世界的流行がもたらしたこの新しい現状を見据えて、計画に必要な変更を加えつつ、江戸期において『歎異抄』を注釈した講義録の英訳を完成させるように継続していく予定である。

なおそのような成果出版に加えて、次世代の研究者の育成が本プロジェクトの主要な目的であるから、ネット開催を試みた今回の状況を反省して、その側面の成果に充分につながっていないということを認めざるを得ない。インターネット回線を通じて、音声によってある程度の情報伝達は可能であるが、今回のワークショップにおいては、創造という側面が強い共同翻訳作業に必要な多角的交流を生み出すことは困難であった。同じ部屋で机を並べて翻訳作業に取り組める状況が少しでも早く戻るように願うばかりである。



円智の部会 (ブラム教授 [右] と和田良世 [中央]。和田氏は UC バークレー 仏教学博士課程在学中の本土真宗宗学科修士 OB)



全体会で発表する嵩満也教授

# 国内研究調査報告

## 「地域と寺院」調査研究現地報告会

新しい時代における寺院のあり方研究班 研究員 藤枝 真

2017年度に立ちあげられた特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」班は、都市部への転出などによる人口減少や、地域に暮らす人々が互いに結び合う関係性の稀薄化しているという現状など、暮らしにとって深刻な問題を抱える現代の地域社会において、その地域社会の実情をまずは把握し、その上で地域における寺院の果たし得る役割を研究し、その成果を公開することを目的としている。本研究は、調査研究をすすめるにあたり、岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区（旧春日村）を調査研究の対象地として、地域調査を継続的に進めてきた。

2019年度は、3年間にわたる研究期間の最終年度であるため、これまでの調査研究の内容を報告する現地報告会を真宗大谷派大垣教務所にて開催した。当日は、聞き取り調査に協力して頂いた方々や大垣教区関係者等をはじめ、テーマに関心のある多くの方々が来聴された。報告会では、下記に示すように3つの視点からの報告がなされた。

地域福祉が専門の山下憲昭研究員による「春日地区における人口動態と地域社会の変化に関する報告」では、住民の転出先に関する傾向がまず示された。それは、揖斐川町において人口が多かった時期も、そしてまた人口が減少した現在も同様に、岐阜県内や愛知県など、自動車を使って比較的短時間で移動できる距離に転出居住するという傾向である。次に触れられたのが揖斐川町春日地区の居住の形態であるが、当地区の家々は軒を接するようなかたちで限られたスペースに建てられているということである。そのため、住民は高い防災意識をもって暮らしており、相互に協力し合う暮らしのスタイルが保持されている。また高齢者のサロン活動の開催も盛んである。これらの事柄に見られるように、暮らしの共同性を実現している春日地区は、過疎の時代のひとつの生き方を提示するものであると山下は主張した。

本林靖久研究員は、宗教人類学の見地から「春日地区における葬送墓制の変化に関する報告」と題して発表した。無墓制であると通常は考えられてきた春日地区であるが、地理的な制限や真宗教義、そして経済的

要因が墓制に影響を与えており、実際には墓制には変遷が認められる。また、仏壇が墓の代わりとしての役割を担ったということの本林は指摘した。当地区では葬儀の際に、伝統的に阿弥陀如来の絵像を寺から借り受けて家での葬儀が執り行われてきたが、葬儀会館などの利用が増えるにつれ、寺と門徒を結び付けてきた習俗も衰退してきているのが現状である。死者をどう弔うのか、生者が死者とどう関わるのか、このような問題を考える際に葬送のあり方の変化は特に重要な視座になると本林は結んだ。

真宗学・宗教学を専門とする木越康研究代表者は、本研究の目的が、ただ単に「寺院をどうするか」という性質のものではなく、地域のために「寺院のあり方を研究する」ということを再確認した。それと同時に、関係者それぞれの思いのズレが見えるとも指摘した。地域で寺院存続を希望し模索する寺院もあれば、離郷して離宗も考える住民がおり、また地域寺院を活性化させて存続させたいという教団側の思惑もある。また、大谷派の同朋会運動においては、死者との関係を家族で維持するという日本の宗教性にこれまで十分に注意が払われないうままであったことも木越は強調した。そのうえで、生者と死者が入り交じる大切な意味を持つ場所として故郷を考え、死者との関わりをなかで人間をとらえる臨床仏教の現場として寺院を見ていく必要があると締めくくった。

つづく質疑応答の時間では、会場と発表者とで活発な議論が行われた。同朋会運動が持っていた「つながり」を作り出す働きは、ズレを生み出した結果と同様に、大切に検討していかなければならないというコメントが会場から出されたのが印象的であった。



# 「新しい時代における寺院のあり方研究」調査報告

嘱託研究員・本学非常勤講師 本林 靖久  
研究補助員 (RA)・博士後期課程社会学専攻第2学年 磯部 美紀

## 【揖斐川町春日地区 (旧春日村) における五日講調査】

調査日時：2019年10月5日(土)午前8時～午後1時  
調査地：旧春日村尾西地区 真宗大谷派法性寺  
調査内容：岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区における五日講の現地調査

調査者：本林 靖久

本調査の目的は、旧春日村における真宗寺院と門徒による五日講の現状を明らかにすることである。五日講は、伊吹山麓に発する揖斐川支流の粕川谷に所在する真宗大谷派8ヶ寺とその各寺院の門徒によって構成されている。教如上人とのゆかりが深い旧春日村では、毎月5日に講中寺院8ヶ寺のうちいずれかの寺院で五日講が執り行われている。5日は教如上人のご命日(慶長19年〔1614〕10月5日)にちなんだものである。

旧春日村の五日講では、この教如上人の自画像である御寿像(慶長11年〔1609〕下付)が講中寺院で1～4ヶ月ずつ御逗留となる。御逗留の寺院では、毎月5日に教如忌としての法座として五日講が勤められている。御寿像は1、7、10月には紐が解かれ、「大寄り」と称して講中寺院の僧侶が参加して、盛大に五日講が開催される。他の月は宝暦4年(1754)に下付された教如上人御絵像の「御前立」を拝している。

御寿像の御逗留の寺院では5日の午後、旧春日地区の講中寺院から27名の「参り番」や有志の人びとが参詣する。27名とは教如上人救出に向かった祖先の人数で、「参り番」は寺院ごとに門徒の中から1～6名が指名される。各寺院では門徒が順番に「参り番」の役を受け持っている。この指名人数と御寿像の滞在月数の違いは、教如上人の救出にあたった各寺院の勇士の人数に由来すると言われる。

五日講の法要は「正信偈」をお勤めし、親鸞聖人の和讃中から独自で六首を選び五日講和讃として勤められている。御消息拝読後、法話、そして、当番となる寺院の門徒が準備した「お齋」が振舞われる。

今回の調査は10月5日の五日講で、教如上人のご命日にあたり、内陣に自画像である御寿像が掛けられ、「大寄り」と称して講中寺院8ヶ寺のうち7ヶ寺の僧侶が参加し、盛大に開催された。

当日は、日中に旧春日村の幹線道路で工事による通

行遮断があるとのことで、午前9時半から法要が始まった。会場となる尾西地区の法性寺では、門徒が午前7時頃に集まり、境内や本堂の掃除を始めた。前日までは、内陣の仏具の手入れや荘厳の立華(花立て)などの準備は済ませている。午前9時頃になると、各寺院の「参り番」に当たっている門徒が本堂に集まった。定刻になると各住職が内陣に出仕し、「正信偈」「五日講和讃」をお勤めし、法性寺住職による御消息拝読、発心寺住職の法話となった。その後、本堂に平机を口の字にして、法性寺の「参り番」の挨拶でお齋となり、各住職と門徒の1時間ばかりの団欒となった。お齋が終わると散会となり、その後、次の御逗留先となる発心寺への御寿像の送迎(引継ぎ)となり、午後1時頃に五日講の行事が滞りなく終わった。

法性寺の門徒は、現在12軒であり、集落に在住する年少者でも65歳を過ぎている。寺院活動の主体者は70歳後半で、毎月の五日講に参加する回り番での「参り番」(2名)の役を受け持つことも大変な状況になっている。法性寺の住職も都会にでて生活しており、法要などの法務があるときに戻ってきている。住職も地域に根ざした宗教活動ができなくなっていることを申し訳なく語っていたが、法性寺の門徒も、「この五日講が、わたしらの寺がやめたので、存続できなくなったとは言われたくない思いで、必死に頑張っている。」と語っていた。

講中寺院8ヶ寺の中には、同様な問題を抱えている寺院が半数はあると言われている。今回の調査では、今後の講のあり方を模索していかなければならない状況であるとともに、五日講の歴史と現状を詳細に記録する必要に迫られていることを強く感じた。



「五日講」法要の様子（法性寺）1



「五日講」御消息拝読の様子（法性寺）2



「五日講」お斎の様子（法性寺）3

【旧春日村周辺の葬送儀礼に関する聞き取り調査】

調査日時：2020年1月15日

調査地：セレモニーホールむらき（揖斐郡大野町）

葬祭センター（岐阜県揖斐郡池田町）

調査内容：旧春日村周辺の葬送儀礼に関する聞き取り調査

調査者：磯部 美紀

本調査は、2019年度上半期に実施した「春日地区

の葬送墓制に関する聞き取り調査」（『研究所報』No.75にて報告済）の補足調査である。先の調査では、旧春日村の寺院を対象に聞き取りを実施し、旧春日村の葬儀変化の特徴の一つとして、葬儀の場が旧春日村の内から外へと移行している点が挙げられることを指摘した（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』37）。これは、葬儀が営まれる場所の移行を示すだけでなく、葬儀の実働を主として担うアクターが地域共同体から葬儀社へと変化したことを表す。このことを踏まえて今回は、旧春日村周辺における葬送の変容について、関与するアクターの変化に着目して検討することを目的に、葬儀社への聞き取りを行った。調査対象は、旧春日村周辺の葬儀社である村木葬祭、JAいび川葬祭センターである。主な調査項目は、①葬儀社の概要（創設年、事業内容の特色と課題、今後の見通し）、②利用者の実態（年間利用者数、葬儀形態、参列者の規模、喪主や故人の所在地、葬儀に求める要素の変化、実際の葬儀に対する感想）、③地域の事情（病院や福祉施設との連続性・提携の有無、葬送墓制に関する習俗）、④寺院の関連事項（菩提寺の僧侶か否か、遺族に僧侶を紹介する際に重視する事柄、遺骨の行方）である。以下では、結果の概要を葬儀社ごとに示す。

大野町に位置する村木葬祭は、昭和16年に村木花店として創業し、葬祭業に関しては葬具の貸出業務を手掛けたことに端を発する。現在でも、地域密着型の葬儀社として周辺地域の人から認識されている。葬儀会館を設立したのは2013年のことであり、家族葬専用の葬儀会館を新たに2017年に設けている。近年では、病院や福祉施設で亡くなった故人を、一旦自宅に連れて帰らずに、葬儀会館併設の安置室に直接安置し、通夜・葬儀を営むことが増えているという。これは、近隣住民に亡くなったことを知られたくない場合や、故人の自宅を遺族が整理できず、遺体を運び込むことができない場合に見受けられる。また、故人を一旦自宅に連れて帰り、町内の人に亡くなったことは伝えつつも、「家族葬でしますから」と、近隣住民の通夜・葬儀への参列を断わり、近親者のみで行う葬儀も増加傾向にあるという。さらに、特別な儀式は行わずに茶毘に付すだけの直葬も、顧客による要望のほか、福祉行政・地域包括支援センターからの要請によって行われているという。葬儀の意味合いの変化に関しては、葬儀は従来イエの当主交代の場だったが、現代の葬儀は故人を火葬するまでの流れの一貫に過ぎないとの見方が示された。旧春日村の葬送事情に関しては、第1に、旧春日村の地区ごとの火葬場を利用していた際には、炉が小さいので通常よりも小ぶりな棺を使用

し、膝を曲げて火葬していたこと、第2に、自宅で通夜をしていた時代には近所の人が米を持ち寄り、お斎の際にはヤカンで日本酒が振舞われるなどお祭りのような賑やかさが見受けられたことが聞かれた。

続いて、JA いび川葬祭センターでの聞き取り調査結果の概要を示していく。葬祭業に関しては、昭和初期から葬具の貸出を行い、村内での葬儀に際して労働力を提供してきたが、10年前に葬儀会館を池田町に設立し、4年程前から葬祭部門が他の事業から独立したという。利用者は組合員に限定されており、揖斐郡内の約3分の1の葬儀を行っている。農協という立場上、大々的に宣伝広告を出すことや豪華なサービスを行うことができない反面、終活支援から遺産相続を含む葬儀前後の一連のサポートを手がけている。旧春日村の葬儀の特徴としては、村の人が僧侶の役割を手助けすることが挙げられた。これが見受けられるのは旧春日村の浄土宗や曹洞宗の寺院が関与する葬儀であり、本来僧侶が担当するナリモノを今でも村の人が行っているという。寺院との関係性について尋ねると、個々のお寺さんの癖（兼業しているから日中は連絡がつかない、車を運転しないから送迎が必要など）について、かつては町内さんが熟知していたが、現在は葬儀社がそれらを把握していないと、葬儀を円滑に進めることができないというケースの増加が聞かれた。当地域において葬儀社は、地域共同体を中心にして担われてきた葬儀執行に関する労働力の提供だけでなく、知識の伝達を補完するものとして捉えられる。

本調査により、当地域での葬儀社の位置づけに関して、都市部の葬儀社とは異なる傾向性を見出すことが出来た。具体的には、商売敵としての寺院と葬儀社という関係性ではなく、従来、地域共同体が担ってきた役割を代替するものとして葬儀社があり、寺院と喪家との関係性を結んでいるということである。今後の課題は、第1に、当地域の葬儀に関与する各アクター（地縁関係者・寺院・葬儀社など）の関係性の変化を時間軸に沿って検討することであり、第2に、手次寺、菩提寺を持たない人・手次寺、菩提寺との関係性を有さない人の葬儀の実態を明らかにすることである。

## 公開講演会・公開研究会

# マイケル・パイ教授の The Eastern Buddhist 誌 編集長退任記念講演会を開催

国際仏教研究 研究代表者・教授 井上 尚実

大谷大学・真宗総合研究所国際仏教研究班、そして The Eastern Buddhist Society が長年にわたりお世話になったマイケル・パイ先生（フィリップス マールブルク大学名誉教授）は、2019年3月末をもって The Eastern Buddhist 誌編集長の職を退かれ、住居もドイツのケルンに移された。2019年の秋、久しぶりに奥様と京都を訪問された機会に、国際仏教研究班を中心にパイ先生の EB 誌編集長退任記念講演会を開催した。11月25日(月)午後5時から響流館3階マルチメディア演習室で開かれた講演会には、木越康学長をはじめ宮下晴輝名誉教授、加来雄之教授、箕浦暁雄教授、藤枝真准教授、廣川智貴准教授など歴代の大谷大学国際仏教研究班の研究員・研究補助員が顔をそろえ、学外からもマールブルク大学との学術交流に参加していただいた龍谷大学名誉教授の高田信良先生や、デンマークから京都を訪問中のエスベン・アンドレアセン先生など、パイ先生と縁の深い宗教学・仏教学の研究者が参集し熱心に耳を傾けた。講演ではまず1990年代初めに遡る大谷大学との学問的な縁を振り返られ、宗教学者としての御自身の歩みの中に位置づけてくださった。

マイケル・パイ先生は1939年に英国で生まれ、ケンブリッジ大学で現代語と神学を学ばれた。その後5年間日本で生活され、帰国してランカスター大学とリーズ大学で宗教学の教鞭を執りながら Ph.D. を取得された。1982年にドイツのマールブルク大学宗教学部教授の職に就かれ、東アジア仏教と現代日本の宗教を専門に研究された。日本でよく知られている研究業績としては 大乘仏教の重要な概念として「方便」を論じた *Skilful Means: a Concept in Mahāyāna Buddhism* (Duckworth, 1978) と、富永仲基の『出定後語』の英訳研究 *Emerging from Meditation* (Duckworth, 1990) が挙げられる。1995年から2000年まで、国際宗教学宗教史会議 (IAHR) 会長の要職に就かれている。大谷大学との縁は、1989年にハワイで開催された第4国際真宗学会における本学の箕浦恵了

教授との出会いを端緒とする。その後1993年に大谷大学で開かれた第6回国際真宗学会にはパネリストとして招かれ、1995年から2年間は大谷大学大学院特別セミナー客員教授として招聘されている。1999年から2003年にかけて活発に行われたマールブルク大学と大谷大学の学術交流においてはドイツ側の中心的な役割を担われ、2004年にマールブルク大学を退職された後の4年間は大谷大学で客員教授を務められた。その頃から毎年気候の良い春と秋の数ヶ月は寺町通りのご自宅で奥様と過ごされていた。マールブルクで指導されたウーゴ・デッシーとエリザベッタ・ボルク夫妻はパイ先生の推薦で京都に留学し、真経研で研究を行って浄土真宗に関する英語の博士論文を出版している (Ugo Dessi, *Ethics and Society in Contemporary Shin Buddhism*, 2007. Elisabetta Porcu, *Pure Land Buddhism in Modern Japanese Culture*, 2008)。またパイ先生の編集により、初期 EB 誌の論文をテーマ毎に5巻にまとめた *The Eastern Buddhist Voices* シリーズが2011年から14年にかけて英国 Equinox 社から出版されている。大谷大学・真宗総合研究所国際仏教研究班との関係で最後にお務めいただいたのが EB 誌編集長の要職であり、2017年3月に急逝された EBS 事務局長の安富信哉先生の願いを受け、2019年3月の任期末まで編集をリードして下さった。今回の退任記念講演では “Learning and Mission in *The Eastern Buddhist*” (「学問の中からこの世に応じる仏教の声—EBの使命」) という2018年の日本宗教学会で発表された論文も配布され、御自身の最新の研究に関してもお話くださった。

講演会終了後、会場をガーデンパレスに移してパイ先生ご夫妻を囲む謝恩の集いが催され、和やかな雰囲気の中、これまで大谷大学・真宗総合研究所・EBSのために大変御尽力いただいたことに対して、心から感謝の気持ちをお伝えした。



講演会終了後、パイ先生ご夫妻を囲んで

## 公開講演会報告

西藏文献研究 研究員・教授 松川 節

2019年11月21日(木)16:30~18:00に響流館マルチメディア演習室にて西藏文献研究班主催による公開講演会が開催され、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所のR. オトゴンバルタル研究員の「イエシェー・ベルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』-寺本婉雅旧蔵-」刊行に寄せて」を拝聴した。

オルドス出身の僧イエシェー・ベルデンにより1835年にチベット語で著された『モンゴル仏教史・宝の数珠』は、モンゴル仏教史を研究する上で大変貴重な史料であり、木版本が作られたが、伝存するものが少なかったため、十分にこれを活用することができなかった。今年8月、本研究班は寺本婉雅旧蔵資料の中にあるこの仏教史書の木版本を、その影印と翻刻テキストに簡単な解説を付して『イエシェー・ベルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』-寺本婉雅旧蔵-』と題し刊行した。『モンゴル仏教史・宝の数珠』にはモンゴル語版が存在し、それは『エルデニイン・エリへ』の名で知られている。こちらは数種の写本が伝存し、その内の一つの影印を1961年にドイツのモンゴル学者ハイシヒ氏が公刊し、以来、研究がなされてきたが、複数の写本を対照させ校訂する作業は、未だ十分に行われているとは言えない。

今回の講師R. オトゴンバルタル氏はモンゴル国を代表する歴史文献学者であり、パスパ文字、ソヨンボ文字などで書かれたモンゴル語・チベット語文献に通暁した専門家である。講演では、モンゴル語版の複数の写本の紹介をしつつ、諸写本を対照させた校訂、チベット語版・モンゴル語版対照の必要性を述べ、本仏教史の価値やチベット語版・モンゴル語版の先後関係について論ぜられた。

モンゴル国のYa. ツェベルはモンゴル国立図書館にある一写本について1937年に言及し、「11.847. エルデニーン・エリへ, 0, モンゴル, 2, 33, 写本, モンゴルの古代のハ(-)ンの続系を明らかにした記録」と記したのは、モンゴル語で著された2冊、33葉であることを示している。ロシアのL. S. プチコフスキーはペテルブルグの東洋研究所に一写本があることを1957年に報告した。デンマークの首都コペンハーゲン市の王立図書館に本書の2つの写本があるうちの1つを選び、W. ハイシヒ氏は1961年に出版したのであった。これはデンマークの学者K. グリュンベクが1938~39年のあいだにツァハル地方から得たものである。内モンゴルの学者スレグはチベット語原本から漢語に翻訳し、1989年に出版した。内モンゴル社会科学院に保存されていたチベット語の木版に依拠したという。内モンゴルの学者ソノム氏は、2007年にモンゴル歴史語文研究所のツェン・オイドブという古老が1957年にチベット語からモンゴル語に翻訳した原本とハイシヒ氏が出版した異本の2本を校閲して出版した。モンゴル国の学者D. ブルネーは、2006年に『モンゴル歴史文献叢書』の第19巻としてモンゴル語写本をキリル文字にして出版した。ハイシヒ氏が以前に出版したモンゴル語写本を利用しており、チベット語版は参照していない。今回、大谷大学からチベット語版が日本語とチベット語の序文、チベット活字による新たな文字起こし、木版本の写真を付して出版されたのは、チベット原本を初めて一般に供与した重要な作業である。

かくして、モンゴル語とチベット語の2つの原典を有するようになったことは、校勘する者にとって最善

のことである。しかしこの両原典のどちらの言語で最初に著されたかについては、まったく証拠が得られていない。大谷大学の編纂者たちの瞥見によれば、モンゴル語原本はチベット語からの翻訳形式の語であるという意見のみが開陳されていると言ってよい。しかし、チベット語の文学がモンゴルの地に強く深く浸透した最近二百年間に含まれる時代に書かれた作品であるため、若干のチベット語著作者のモンゴル文語も、

チベット語に相当捉われている特徴を持つことに留意する必要がある。



講師のオトゴンバートル先生を囲んで

## モンゴル国立大学との共同研究会報告

西藏文献研究 研究員・教授 松川 節

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究「モンゴルにおける仏敎の後期発展期(13~17世紀)の仏敎寺院の考古学・歴史学・宗敎学的研究」の一環として、2020年1月24日~1月31日までモンゴル国立大学総合科学部人文系哲学・宗敎学科のS. ヤンジンスレン准教授を大谷大学に招聘し、共同研究を行った。1月30日(木)16:30~18:00に響流館マルチメディア演習室にて西藏文献研究班主催で公開講演会を開催し、S. ヤンジンスレン准教授の講演「ザワ・ダムディン・ガブジ(1867~1937)」を拝聴した。

ザワ・ダムディン (rTsa ba rta mgrin/Blo bzang rta dbyangs, 1867-1937) は、19世紀末から20世紀前半のモンゴルを代表する学僧であり、モンゴル科学アカデミーの前身である文学・文字研究所のメンバーでもあった人物である。『モンゴル仏敎史・黄金の書(Hor gyi chos 'byung gser gyi deb ther)』『中観概説割注・甚深義明解灯(dBu ma'i spyi don gyi mchan 'grel zab don rab gsal sgron me)』『秘密集会根本タントラ割注・密蔵百門開放鍵(dPal gsang ba 'dus pa'i rtsa ba'i rgyud kyi mchan 'grel gsang mdzod sgo brgya 'byed pa'i lde mig)』など歴史から仏敎教義に至る幅広いジャンルの著作をチベット語で著し、また、法頭の西域・インド旅行記『仏国記』をチベット語に翻訳した。それらは、全17函からなる全集に収められている。今回の講演では、彼の著作の概要、伝記、翻訳、全集の出版、学術的研究方法についてお話しいただいた。(講演では、全17函の全集の内容について極めて詳細な紹介があったが、紙幅の関係で、別の機会の公表に俟ちたい。)

彼の名前の前に付される「ザワ/rtsha ba/」という語は、「根本」という意味のチベット語であり、顕敎の五巻に通曉していたためにこの名を馳せた。ザ

ワ・ダムディンの直弟子バルダンサンボー・ドーロンボは、師の全集の目録『業の太陽を導く曙光』を著した。1931年までの著作189点が収載されている。これらの作品のうち、ザワ・ダムディンの愛弟子であるシーデヴ・アグランバが所蔵していたものを、故ゴンチクトルジは1970年頃にインドに送り、モンゴル僧グル・デワ・リンポチュエの支援によって12函の全集を数え直して17函となし、1976年に書写して出版したものが、現在、最も完全な全集であると見なされている。しかし、本全集の目録にある若干の著作は全集に含まれておらず、逆に目録に含まれない若干の著作が全集に収められているところから見ると、この全集が完全版であると見るのは、やや可能性が低いようである。

ザワ・ダムディン・ガブジが著した仏敎哲学書に関しては、解釈書が主である。しかし、それによって彼の著作の価値が下がるわけではなく、インド・チベットの賢者たちが現した著作と親しみ、その内容を解釈し、見識が合致しない箇所においてその他の善説を典拠として解き明かし、自説を開陳・発展させつつチベット語で著したことは、彼の著作の真価を有する面といえる。



講師のヤンジンスレン先生を囲んで



ザワ・ダムディンの全集について紹介するヤンジンスレン先生

## 廖欽彬先生による公開研究会

清沢満之研究 研究員 加来 雄之

清沢満之研究では、2019年12月19日(木)の16時20分より、中国広州中山大学・哲学系准教授、国際日本文化研究センター外国人研究員の廖欽彬 (Liao Chinping) 先生を招聘して公開研究会を開催した。廖先生から「清沢満之の自他力論と京都学派への影響」というテーマで研究発表がなされた。会場は、響流館3階マルチメディア演習室で、研究会には、本学をはじめ関係各所より、真宗学・仏教学・哲学・史学などの諸分野の専門家、学生などが多く来聴し、総勢29名の参加者があった。

廖欽彬先生は台湾出身で、日本筑波大学で博士号を取得され、日本哲学や宗教哲学、とくに日中台の文化を横断する視点から哲学の課題に取り組む新進気鋭の研究者である。2019年7月より国際日本文化研究センターの外国人研究員として、日本のさまざまな大学において多岐にわたって活躍されている。氏には多くの業績があるが、今回の発表にかかわるものとしては、2018年には、日本語で『宗教哲学の救済論－後期田辺哲学の研究－』（日本学叢書 第31号、国立台湾大学出版中心、2018年）を出版している。清

沢満之についても早くから注目し、すでに〈清澤満之的宗教哲学－自我、世界、無限〉（《掲諦學刊》、2010年、31-72頁。）〈近代日本宗教哲學的開展－從清澤満之、西田幾多郎到田邊元〉（《臺灣東亞文明研究學刊》、2012年、45-72頁）という二論文も執筆している。

廖先生は、日本哲学については西田幾多郎、鈴木大拙、田辺元、清沢、延いては親鸞の思想にも関心をもっており、宗教哲学者・真宗仏教者・清沢満之についての本格的な研究者としては、おそらく中国で唯一と思われる。先生の日文研での任期が限られていることもあり、是非ともその期間中に、本学を中心とした専門家の間で意見交換・情報共有すべきであるとの提言があった。そこで、本研究班において先生を講師として公開研究会を開催する運びとなった。

90分という限られた時間ではあったが、廖先生は、発表に先立ってみずから清沢や親鸞などの他力の思想に関心をもつに至った動機を語り、その後、パワーポイントをもちいて、「一 明治期仏教の歴史的背景、二 学的背景と哲学の教師、三 清沢研究のパター

ン、四 宗教哲学のスタイル：語る主体と対象、五 絶対他力に摂取される以前と以後、六 自力と他力、七 京都学派への影響、八 今後の清沢研究の構想（異文化のアプローチ）」の8項目にわたって内容の濃い、熱のこもった発表を行った。

発表のなかで廖先生からは、台湾や中国における清沢満之や真宗の研究の現況や課題などが具体的に報告され、最後には、真宗の中国大陆における宗教哲学としての受容、さらには東アジアの仏教の近代化という、諸分野・諸地域における影響の解明などの共通課題に大谷大学を含めた東アジアの研究サークルを結成すべきとの提案がされた。とくに今後の研究構想の一つとして提示された異文化からのアプローチは、清沢研究が東アジアにおいて展開していく可能性を感じさせる内容であった。

質疑の際には活発な議論や意見交換が行われ、学際的研究の場として大変有益な機会になり、盛況に終えることができた。



廖欽彬先生による研究発表 1



廖欽彬先生による研究発表 2

## 東京分室「宗教と社会」研究会報告

研究代表者・准教授 井黒 忍

本指定研究では、2019年11月18日(月)に木越康氏(大谷大学学長)を報告者として招聘し「宗教と社会」研究会を開催した。木越氏の報告「『臨床仏教』という発想から-「新しい時代における寺院のあり方研究へ」」を聞いた後、質疑応答を行った。報告内容の概要は以下の通りである。

東北大震災の後より、心のケアを行う宗教者としての臨床宗教師や生老病死にまつわる現代社会の苦悩と向き合い、専門的な知識や実践経験をもとに行動する臨床仏教師の役割に注目が集まるが、これとは異なる「臨床仏教」(Contemporary Buddhism)という発想の重要性を指摘する。この発想の背景には、鷲田清一

氏(大谷大学客員教授)の説く臨床哲学の影響があるとともに、1990年代後半から2000年代にかけて行動する仏教、あるいは社会参加型仏教というべき Engaged Buddhism において、本来は個を対象とする仏教がいかに社会を対象とすることができるのかという発想が用いられた点からも影響を受けている。

ただし、Engage が「現場を重視すること」や「現場への介入する」態度を実質的な内容とするのに対して、報告者が「臨床仏教」という言葉で考えようとしているのは、たとえば経論釈に表現される仏教思想や仏教的真理を、その「問い」が生まれた「大地性」の中から捉え直すということである。「大地性」とは鈴



木大拙の言葉であり、「靈性」と不可分なるものとして理解される「大地」とは、「根源」、「観念の反対にあるものとしての具体」、「生命が生まれ帰る場」である。

また、臨床仏教師の養成という取り組みが、仏教思想や親鸞思想を学び、それを行動する主体の精神の根底に置いた上で、加えて実践の際に現場で必要とされるであろう専門的知識と技能を身につけ、そこで初めて現場に降りていくというものであるのに対して、「臨床仏教」とはそうではなく、現場そのもので「仏教する」、「真宗する」ということになる。つまりは現場の中に仏教的思想を置き直すという態度だと考える。

これは、大学や特定機関において一定の専門的学びや実習を経て誕生する専門家が、一つの目的をもって積極的に「現場」へ介入するという、言わばこちら側からあちら側ということではなく、その発想を逆転させ、あちら側からこちら側へという姿勢を意味している。あるいは「上から下へ」ではなく「下から上へ」という動きをイメージさせるようなものとしてあるのが、報告者が言う「臨床仏教」であるとすると。

さらに、報告者の発想の背景には、外部からの真宗学に対する社会性の欠落を批判する声などとともに、東日本大震災後の被災地におけるボランティア活動の中での体験に基づく社会的意義、実践的意義の追求という動機付けがあった。被災者の声から現場から発想することの必要性がより強く導き出されたこととなる。

こうした中、2017年度より大谷大学真宗総合研究

所の特定制研究としてスタートした「新しい時代における寺院のあり方研究」は、寺院のための「寺院のあり方」ではなく、地域のための「寺院のあり方」を模索するという視点に立ち、真宗学のみならず、歴史学、宗教学、地域社会学、地域福祉学、宗教人類学などの研究者が参加する多分野融合型の研究手法を用いることで、関係者それぞれの「思い」のズレをつかむことに成功した。そこでは、墓を媒介とする家族の宗教として仏教が認識され、こうした意味において地域とは生者と死者入り混じる場所ともいべき空間であるとの理解が示された。

報告の後には、寺院のあり方研究の将来的な目的はどのような点として想定されているのか、あるいは文献学を学ぶ意義はといった質問があり、これらに対して現状や現場を理解し、現場に生きる人々の声に耳を傾け、彼ら彼女らに語りかけることが必要であるとの回答がなされた。



東京分室 木越氏公開講演会

## 東京分室「宗教と社会」研究会報告

研究代表者・准教授 井黒 忍

本指定研究では、美術史を中心に行われてきた仏像研究に対し、仏像を「物質文化」と捉えて近代の仏像のさまざまなあり方を研究する君島彩子氏（駒澤大学仏教経済研究所研究員）を報告者として招聘し、2019年12月2日(月)に研究会を開催した。詳細なフィールドワークと時代状況の把握、仏像に関わる人物たちをより広く捉える君島氏の研究から、本指定研究の研究目的である社会的価値観と宗教との関係を検討する。

君島氏の報告「公共空間における仏像の役割—広島・長崎・沖縄の平和公園内の観音像を中心に—」の概要は以下の通りである。

本報告では、具体例として広島、長崎、沖縄の「平

和公園」に設置された観音像をとりあげ、比較検討を行う。平和公園においては、「平和」を象徴するモニュメントが重要な役割を果たしており、その一形態として観音像が選ばれている。原爆が投下された場所に造成された広島市の「広島平和記念公園」と長崎の「平和公園」、沖縄戦の終焉の地に造成された糸満市の「沖縄平和祈念公園」、3つの公園には観音像や観音像に類似する彫刻が存在している。公共的な平和を祈る空間において共通して観音像が求められたこととなる。

1945年、広島、長崎、沖縄において原子爆弾や地上戦によって多くの命が失われた。このため広島、長

崎、沖縄に共通して「十三回忌」にあたる1956～57年に観音像が発願された。個々の地域における宗教文化的な基盤は異なっているが、観音像の発願理由としては仏教的な信仰に基づく多数の死者の慰霊にこれが求められたのである。三回忌や七回忌ではなく十三回忌となったのは、敗戦からある程度の時間が経ったことで、それまで生きることに精一杯だった人々が、慰霊のためのモニュメントについて意識する程度の余裕がでてきた時期だったのかもしれない。

公共空間においても戦争死者慰霊が重視された。特に長崎と広島において遺族は、遺骨を供養する仏として捉えていた。平和公園など戦争に関連する場所に観音像が設置されることは、戦争死者に対する祈りを想起させる。戦争死者に対する祈りは、平和を願うことにも繋がる。だが、戦争の実態について伝えることは観音像の造形のみでは出来ない。そのため碑文や他のモニュメントによる詳しい説明を行うことで、詳細に戦争の記憶を伝えられることが可能となった。新たなモニュメントを加え記憶の継承の場となった広島の《平和乃観音》や、美術家、山田真山の物語とともに語られる《沖縄平和祈念像》は、平和公園において戦争の記憶を伝えるモニュメントとしての役割も担っている。

これに対し長崎の納骨堂では、観音像を「本尊」として仏教的な死者の慰霊を重視してきたことで、モニュメントとしての意味付けが不明確となっている。だ

が、《聖観世音》に対して美術的価値を評価することや、自らも被爆しながら仏像を彫り続けた地元の仏師の物語などの情報を付与することで、モニュメントとして再び認識されることもあるかもしれない。

仏像が公共空間に設置される時、その美術的価値も重要であった。靖国問題などの影響もあり戦後の日本において公共空間における宗教的造形物に対しては厳しい意見が出されることも多い。だが、それでも観音像や観音像に類似した像が求められたのは、仏像の造形が死者に対する祈りを想起させるものだったからである。そのような見慣れた姿に対する愛着は、北村西望による《平和祈念像》に対する地域の人々の嫌悪感からも明らかであろう。



東京分室 君島氏研究会

## 北海道シンポジウム報告

新しい時代における寺院のあり方研究班 研究員 藤元 雅文

テーマ「人口減少社会の現在と次世代の育成－地域と寺院の視点から－」

真宗総合研究所・特定研究班（2019年度当時）では上記のテーマのもと2019年10月20日(日)13:30～16:00、札幌にて公開シンポジウムを開催した。この公開シンポジウムは、特定研究班が中心となって、4名のパネリストの報告と聴衆からの質疑を含めた内容として行われ、コーディネーターは藤枝真研究員がとめた。ここではパネリストの報告内容を中心に記すこととしたい。

### 1. 木越康（研究代表）

「〈生者〉と〈死者〉の交わる場－古くて新しい共同体の探究－」

本発表では、特定研究班の調査を踏まえ、過疎という課題を共有している同地区内であっても、地域と寺

院の具体的な問題は多種多様であり、調査が進むほど単純ではない課題の状況が明らかになることが言及された。一方、それでも「過疎地域」に共通する課題として、「〈生者〉と〈死者〉が入り混じる形で大切な意味を持つ場所」の存続が問題となっており、そのような視点で「地域と寺院」あるいは「古くて新しい共同体の探究」が重要であることが指摘された。

### 2. 金石潤導（開正寺住職、真宗大谷派北海道教区教化本部長）

「人口減少社会の現在と次世代の育成－北海道の真宗寺院の視点から－」

現在、北海道では確かに人口減少が問題になっており、寺離れも進行している。しかし、問題は人が減っていくという現象面よりも、昔は「子宝」と言われるような子ども観があったが、現代は「金がかかる存

在」として子どもが認識されるようになった、その子どもも親ではないかと指摘された。更に、そのような子ども親のもとには「設計主義」と「いのちの選別化」という考え方が存在しており、その考えこそ現代において問われるべきではないかと主張された。

### 3. 櫻井義秀 (北海道大学・教授)

「人口減少時代の生き方－フルスペックの人生を問い直す」

フルスペックの人生を追い求め、人と比較して、自分は相対的に恵まれていないと思い、不幸、不安感を増していく人々が多い現代の日本の状況を OECD の資料に基づいて説明された。一方、人には弱さがあり、おもいがけない災害、事故に遭うのが人生であり、そういう状況に追い込まれた人を支える社会こそ、幸福感が高まる社会になるのではないかと問いかけられた。また、「家庭」(第一の空間)や「学校・職場」(第二の空間)とは違う「第三の空間(こころがよい、平等・中立、なじみがある)」としての役割が現代において寺院により強く期待されており、人はひとりで生きていけないということを寺院から発信してほしいとの希望が述べられた。

### 4. 徳田剛 (研究員)

「地方に暮らす子ども・若者」に寄り添う－地域社会、学校、寺院にできること－

「地方に暮らす子ども・若者」の近年の現状を指摘しつつ、特に地域の大人たちが子どもたちを「われらの子ども」として受けとめるあり方が崩れ、個々に「うちの子」と捉えていくあり方へと大きく変化したのが現在の状況であると言及された。その上で、3の報告にも指摘された「第三の場所(空間)」として寺院が存在することによって、寺院への関わりが子どもたち・若い親たちの双方にとって、リアルな人間関係の幅を広げ、人生や子育ての悩みへの助言やヒントが得られる機会ともなること等、現在における寺院のあり方の可能性を示唆した報告内容であった。

また、報告後の質疑において、伝統されてきた「家の宗教」は、自分のいのちの根底にあるつながりに気づくという大切な智慧が含まれている側面があるとともに、「個の自覚」を大切にするのであれば、個と個がどのようにつながるのかについて更に考える必要があるのではないかなど、様々な議論や意見の交換が繰り返された。シンポジウム全体として、共同体が解体され個人主義が行き過ぎる中で生じる様々な問題は過疎地域のみならず日本社会の処々に生じている問題であり、(死者を含めた)人と人のつながりをどのように捉え、考えていくことができるかという所に、地域と寺院を考える重要な視座が存在することを示唆するシンポジウムの内容となった。

## 国際シンポジウム 女性と仏教－問題と展望－

国際仏教研究班 研究員 DASH Shobha Rani

2019年10月11日(金)に国際仏教研究班(指定研究)の研究活動の一つとして「女性と仏教－問題と展望－」という題名で国際シンポジウムが開催された。女性と仏教のかかわりの現状と将来の展開を共に考え、仏教における女性の役割や位置づけを検討し、女性と仏教のネットワークを形成するための情報を共有することが本シンポジウムの目的であった。海外から2名、国内から1名、合計3名の発表者による講演が行われ、その後、オープン・ディスカッションが実施された。それぞれの発表者の発表題名及び発表概要は以下の通りである。

#### ①望月慶子氏(当時真宗大谷派・宗議会議員)

「浄土真宗の寺院における女性の役割」

日本仏教の諸宗派の中でも、浄土真宗は「非僧非

俗」という特徴がある。住職の配偶者は「坊守」と言われ、寺院運営に重要な役割を果たしている。望月氏は真宗寺院の坊守でもあり、同時に宗門における女性の地位の向上のために宗議会議員となり、初の女性参務としても活躍してこられた。本講演では、そういう実践者としての立場から、坊守の誕生した歴史的な経緯、寺院や宗門における位置づけ、坊守の果たしてきた役割などを通して浄土真宗における女性と仏教のかかわりについて述べていただいた。

#### ②Prof. Dr. Ute Hüsken氏(Department of Cultural and Religious History of South Asia, South Asia Institute, ハイデルベルク大学)

「革新としての伝統－欧米における比丘尼僧伽－」  
※交通事故のため来日できず、送られてきたパワー

ポイントの資料と画像を筆者が代読して説明した。本発表は、欧米におけるテーラヴァーダ比丘尼僧伽の成立とその過程についての考察である。その過程において為されなければならないことは、単に言語上のギャップを埋めることではない。テキストを実践に向けて翻訳することは、伝達の過程において、変容あるいはトランスクリエーションを必然的にもたすが、そのいくつかの仕方を指摘する。この種の伝達は、実践活動や言語や社会的環境や期間などの共同体あるいはその構成要素の混合体を接続することもあれば分離することもある。この伝達の複雑な過程は、必然的に何か新しいものを作り出す重大な取り組みとして理解されるべきものである。(使用言語：英語)

③Dr. Christie Chang 氏 (Council on International Educational Exchange, 台湾國立政治大學)

「女性仏教徒のネットワークを作り世界に橋を架けることで“解放と新たな地平”を目指そう」:

「釈迦の娘」を意味する国際女性仏教徒学会である Sakyadhita International Lay Buddhist Forum (ILBF) and International Buddhist Confederation (IBC) との関わりから得た経験を通して、女性仏教徒が直面する様々な問題と、今日われわれが女性仏教徒として有する「賢明な希望」とを共有していただいた。その「賢明な希望」とは、われわれの周辺に横たわる隔たりを少しでも埋めるために、互いに協力して女性仏教徒のネットワークを作り、それによってすべての衆生を解放と新たな地平へと導くために仏法を手段として用いることであると Chang 氏は主張した。(使用言語：英語)

本シンポジウムに得られた情報、意見などを参考にし、今後「女性と仏教」というテーマで継続的に研究活動が続ける予定である。



Dr. Christie Chang による発表の様子

# 真宗総合研究所彙報 2019. 10. 1 ~ 2020. 3. 31

## ■研究所関係

### ◎研究所委員会

◇2019年10月10日(木)12:20~12:50(博綜館第5会議室)

1. 特別研究員の人事について
2. 2019年度研究組織について
3. 『真宗総合研究所研究紀要』第37号査読者について
4. 報告事項
5. その他
  - ・今後のスケジュールについて

◇2019年11月22日(金)16:20~17:20(博綜館第5会議室)

1. 『真宗総合研究所研究紀要』第37号投稿論文の査読結果について
2. その他

◇2020年1月24日(金)16:20~17:20(博綜館第5会議室)

1. 2020年度「一般研究」について
2. その他

◇2020年3月23日(月)10:00~11:30(博綜館第4会議室)

1. 2020年度「特定研究・指定研究」等の研究組織・研究計画について
2. その他

○2019年度「特定・指定研究」資料室研究成果報告会  
2020年3月5日(木)15:30~17:40(慶聞館4階 K406教室)

○2019年度研究員総会  
2020年3月5日(木)17:40~18:00(慶聞館4階 K406教室)

1. 2020年度特定研究について
2. その他

## 新しい時代における寺院のあり方研究

### 【寺院・門徒調査】

日 時 2019年10月5日(土)  
場 所 法性寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美東)  
内 容 五日講に関する聞き取り調査  
参加者 本林靖久

日 時 2020年1月15日(木)  
場 所 セレモニーホールむらき(揖斐郡大野町)

葬祭センター(岐阜県揖斐郡池田町)

内 容 旧春日村周辺の葬送儀礼に関する聞き取り調査  
参加者 磯部美紀

### 【公開シンポジウム】

日 時 2019年10月20日(日)13:30~16:00  
会 場 札幌国際ビル8階  
テーマ 人口減少社会の現在と次世代の育成-地域と寺院の視点から-  
パネリスト 櫻井義秀(北海道大学教授) 金石潤導(開正寺住職, 真宗大谷派北海道教区教化本部長) 木越康(本学学長) 徳田剛(本学准教授)  
コーディネーター 藤枝真(本学准教授)

### 【現地報告会】

日 時 2020年2月27日(木)15:00~17:00  
場 所 真宗大谷派大垣教務所  
内 容 揖斐川町春日地区における「地域と寺院」調査研究報告会  
報告者 木越康(本学教授) 山下憲昭(本学教授) 本林靖久(本学非常勤講師)

### 【ミーティング】

◇第9回  
日 時 2019年10月8日(火)  
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真 藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 大谷大学フェアにおけるシンポジウム(in 札幌)、春日地区調査等

◇第10回  
日 時 2019年10月15日(火)14:40~16:10  
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真 藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 大谷大学フェアにおけるシンポジウム(in 札幌)直前打ち合わせ等

◇第11回  
日 時 2019年11月5日(火)14:40~16:10

出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真  
藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 科研、真総研一般研究の申請に関するの検討等

◇第12回

日 時 2019年11月19日(火)14:40~16:10  
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真  
藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 科研、真総研一般研究の申請および現地  
(春日、大垣)報告会の検討等

◇第13回

日 時 2019年12月3日(火)14:40~16:10  
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真  
藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 現地研究調査報告会、今年度研究成果につ  
いての検討等

◇第14回

日 時 2019年12月17日(火)14:40~16:10  
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真  
藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 特定研究、各研究員の総括等

◇第15回

日 時 2020年1月21日(火)14:40~16:10  
出席者 東館紹見 山下憲昭 徳田剛 藤枝真  
藤元雅文 野村実 松岡淳爾 磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 現地研究報告会および学内研究成果報告に  
ついて

◇第16回

日 時 2020年2月12日(木)16:00~18:00  
出席者 木越康 東館紹見 山下憲昭 徳田剛  
藤枝真 藤元雅文 野村実 松岡淳爾  
磯部美紀  
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム  
内 容 現地研究報告会の最終打ち合わせ、学内研  
究成果報告の検討等

**国際仏教研究**

【ワークショップ】

◇日時：2019年10月11日(金)10:30~17:00  
於：マルチメディア演習室（響流館3階）  
内容：女性と仏教ワークショップ

**西藏文献研究**

【公開講演会】

◇11月21日(木)16:30~18:00  
「イエシュー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の  
数珠』——寺本婉雅旧蔵——」刊行に寄せて」  
講 師：R. オトゴンバートル氏（モンゴル科学ア  
カデミー言語文学研究所研究員）  
場 所：響流館マルチメディア演習室

◇1月30日(木)16:30~18:00

「19~20世紀のモンゴル僧ザワダムディン・ガブ  
ジの著作について」  
講 師：S. ヤンジンズレン氏（モンゴル国立大学  
総合科学部人文系哲学・宗教学科准教授）  
場 所：響流館マルチメディア演習室

【研究打ち合わせ】

◇3月11日(木)16:30~  
場 所：真宗総合研究所ミーティング・ルーム  
内 容：2020年度の研究計画について

**清沢満之研究**

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2019年10月3日(木)16:30~18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項の確認

◇第2回

日 時：2019年10月10日(木)16:30~18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項の確認

◇第3回

日 時：2019年10月17日(木)16:30~18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項の確認

- ◇第4回  
日 時：2019年10月24日(木)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項の確認
- ◇第5回  
日 時：2019年10月31日(木)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：別巻I入稿原稿の確認
- ◇第6回  
日 時：2019年11月7日(木)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項確認
- ◇第7回  
日 時：2019年11月15日(金)13:30～14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項確認
- ◇第8回  
日 時：2019年11月21日(木)18:00～19:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項確認
- ◇第9回  
日 時：2019年11月29日(金)13:00～14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせの検討事項確認
- ◇第10回  
日 時：2019年12月5日(木)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：別巻I初稿原稿確認事項等の検討
- ◇第11回  
日 時：2019年12月11日(木)12:20～13:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所フリースペース  
目 的：読み合わせ検討事項の確認
- ◇第12回  
日 時：2019年12月13日(金)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：公開講演会準備  
読み合わせ検討事項の確認
- ◇第13回  
日 時：2019年12月20日(金)14:40～16:20  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I原稿(初稿)の確認
- ◇第14回  
日 時：2019年12月23日(月)13:00～14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I原稿(初稿)の検討
- ◇第15回  
日 時：2020年1月7日(火)12:00～13:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I原稿(初稿)の確認  
全体会議議題の最終確認
- ◇第16回  
日 時：2020年1月9日(木)16:30～18:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I入稿原稿(初校)の作成
- ◇第17回  
日 時：2020年1月15日(水)17:30～19:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I入稿原稿(初校)の作成
- ◇第18回  
日 時：2020年1月17日(金)14:40～16:10  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻I、IIの検討事項の確認
- ◇第19回  
日 時：2019年1月24日(金)14:00～15:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ、Ⅱの検討事項の確認

◇第20回

日 時：2020年1月30日(木)16:00~17:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ目時、図版、注の検討

◇第21回

日 時：2020年2月6日(木)10:40~12:10  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ原稿（再校）の検討

◇第22回

日 時：2020年2月13日(木)13:00~14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ入稿原稿（再校）の作成

◇第23回

日 時：2020年2月17日(月)10:40~12:10  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰの校正箇所の確認

◇第24回

日 時：2020年2月27日(木)13:00~14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ原稿（三校）の確認、検討

◇第25回

日 時：2020年3月2日(月)14:00~16:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ原稿（三校）の確認  
別巻Ⅰ入稿原稿（三校）の作成

◇第26回

日 時：2020年3月12日(木)16:00~17:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ入稿原稿の確認事項の検討

◇第27回

日 時：2020年3月16日(月)14:00~16:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅰ入稿原稿の最終変更箇所の作成

◇第28回

日 時：2020年3月27日(金)13:00~14:30  
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央  
会 場：真宗総合研究所編集室  
目 的：別巻Ⅱ刊行スケジュール確認

※この間、当班構成員を三班に分け、各班週一回を目処に別巻Ⅱ収録予定資料の読み合わせを行なった。

【全体会議】

◇第1回

日 時：2020年2月19日(木)12:10~13:00  
出席者：西本祐攝、大艸啓、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、西尾浩二、浦井聡、藤井了興  
会 場：真宗総合研究所ミーティングルーム  
目 的：清沢班作業全体の進捗状況報告  
研究計画、岩波書店との交渉、読み合わせ班の再編、研究会に関して

【公開講演会】

日 程：2019年12月19日(木)16:20~18:00  
場 所：大谷大学響流館3階マルチメディア演習室  
講演者：廖欽彬（中国広州中山大学哲学系准教授、国際日本文化研究センター外国人研究員）  
題 目：清沢満之の自他力論と京都学派への影響

【刊行物】

題 名：『清沢満之の全集 別巻Ⅰ』  
刊行日：2020年3月27日(金)  
出版社：岩波書店

大谷大学史資料室

【研究会参加】

◇全国大学史資料協議会 2019年度総会ならびに全国研究会  
日 程：2019年10月16日(水)~10月18日(金)  
場 所：立教大学・学習院大学・日本女子大学  
参加者：松岡智美



## ◇全国大学史資料協議会西日本部会 2019年度第4回研究会

日 程：2019年12月6日(金)  
場 所：広島県立文書館  
参加者：松岡智美

## 【史料調査】

2020年2月に学内から1件の所蔵史料に関する問い合わせを受け、調査・報告を行った。

## 【展示活動】

◇2020年3月30日(月)17:00~18:00

図書館エントランス展示スペース「年表でみる大谷大学の歴史」の展示準備

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、貸出等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

## デジタル・アーカイブ資料室 (パリ関係)

## 【国内出張】

◇2020年1月24日(金)

場 所：龍谷大学 大宮学舎  
目 的：公開講演会「日本と東南アジアの仏教交流」での発表(発表題目：「仏教経典をめぐる日タイ交流の史実と現実」)  
出張者：清水洋平(嘱託研究員)

## 【海外出張】

◇2020年2月16日(日)~2月25日(火)

場 所：ネパール：ルンビニー、及びタイ：バンコク  
目 的：国際会議での発表、及びタイ国内パリ語写本関係調査  
出張者：清水洋平・舟橋智哉(ともに嘱託研究員)

## ■東京分室

## 【出張】

◇2019年10月10日(木)~11日(金)

出張先：大谷大学  
用 務：大谷大学図書館にて資料収集(10日)、大谷大学真宗総合研究所国際仏教研究班主催の国際シンポジウム「女性と仏教-問題と展望-」に参加(11日)  
出張者：大澤絢子

◇2019年12月3日(火)

出張先：聞法会館(京都)  
用 務：浄土真宗十派をつなぐ女性の会主催の研究會「浄土真宗と女性~わたしにとっての第三十五願とは~」に参加。山内小夜子氏との2019年度3月に開催予定のシンポジウムに向けた打ち合わせ。  
出張者：大澤絢子

◇2019年12月26日(木)~2020年1月3日(金)

(内、2019年12月30日~12月31日は個人研究での出張)  
出張先：フランス国立図書館、ノートルダム大聖堂、マレ地区  
用 務：アレクシオン・フランセーズ関連の文献資料調査、カトリック教会における現地調査  
出張者：西村晶絵

## ■一般研究出張関係

## 一般研究大原班

◇2019年11月20日(休)

出張先：FM わいわい(神戸市長田区海運町3-3-8 たかとりコミュニティセンター内)  
用 務：コミュニティFMへのヒアリング調査  
出張者：大原ゆい

◇2019年11月24日(日)

出張先：富山国際会議場(富山県富山市大手町1-2)  
用 務：第9回地域共生ホーム全国セミナー in とやま 参加  
出張者：大原ゆい

◇2019年12月8日(日)

出張先：立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区西池袋3-34-1)  
用 務：「日本福祉介護情報学会第21回研究大会」参加及び発表  
出張者：大原ゆい

◇2019年12月21日(土)

出張先：立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区西池袋3-34-1)  
用 務：「10代少女たちをどう支えるか-日韓比較の実践から当事者主体の支援のあり方を考えるシンポジウム」参加  
出張者：大原ゆい

◇2020年1月11日(土)

出張先：日本学術会議講堂（東京都港区六本木 7-22-34）

用務：シンポジウム「日本福祉介護情報学会第21回研究大会」参加

出張者：大原ゆい

### 一般研究井黒班

◇2019年10月23日(水)～28日(月)

出張先：National Cheng Kung University（台湾台南市大学路1号）

用務：「第5回 East Asian Environmental History 2019大会」参加

出張者：井黒忍

### ■組織（2020年6月1日現在）

□研究所委員会

浦山あゆみ（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）

Dash Shobha Rani（真宗総合研究所主事）

村山 保史（大学院研究科長）

山内 美智（教育研究支援部事務部長）

岡田 治之（教育研究支援課長）

松川 節（教授）

阿部 利洋（教授）

箕浦 暁雄（教授）

新田 智通（准教授）

藤原 正寿（准教授）

井黒 忍（准教授）

□私立大学研究ブランディング事業ワーキングチーム

浦山あゆみ（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）

Dash Shobha Rani（真宗総合研究所主事）

箕浦 暁雄（国際仏教研究研究員、特定研究研究員）

Michael J. Conway（国際仏教研究研究員）

井黒 忍（国際仏教研究嘱託研究員）

井上 尚実（国際仏教研究代表者）

新田 智通（国際仏教研究研究員）

松浦 典弘（国際仏教研究研究員）

松川 節（国際仏教研究研究員、西藏文献研究研究員）

藤谷 徳孝（企画・入試部事務部長）

山内 美智（教育研究支援部事務部長）

### ■人事

真宗総合研究所主事

（新）Dash Shobha Rani（旧）阿部 利洋

（2020年4月1日付）

### ■特別研究員

□新規採用（2020年4月1日付）

\*野村 実

現職：任期制助教

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

研究課題：中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究

\*山本 春奈

現職：任期制助教

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

研究課題：戦国期の誓約をめぐる社会的思想史的研究

\*狭間 芳樹

現職：非常勤講師

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

研究課題：維新时期における東本願寺の破邪論とキリシタン  
－樋口龍温の未公開史料の分析と公開－

\*本林 靖久

現職：非常勤講師

研究期間：2020年4月1日～2023年3月31日

研究課題：真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究

□解任（2020年3月31日付）

岩本真利絵

服部 徹也

（2020年7月31日付）

松岡 智美



研 究 所 報 第 76 号

2020 年 9 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp